平和な世界

タフボーイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
平和な世界

【Ｎコード】
Ｎ３４６１Ｓ

【作者名】
タフボーイ

【あらすじ】
両親を幼いころに失った兄妹。
妹の美咲は家事をこなしながら高校に通う女の子。
あることがきっかけで異世界に行くことになり・・・
自称正統派ファンタジーです。

序章

「おはよう、お兄ちゃん」

美咲は自分の弁当箱に、自慢の卵焼きを詰めながら言った。

「おお、今日から授業始まるんだっけ？」

拓斗は頭を掻きながら、食卓の椅子に座った。

「いいよね、大学生はゆっくりできて～」

そう言いながら美咲は、制服であるセーラー服に着替えるために自分の部屋に入った。

☆★☆★☆★

着替えを終えた美咲はそのまま両親の仏壇の前に座った。

「お父さん、お母さん、行ってきます」

立ち上がり、学生鞄に弁当箱を入れた。

「じゃ、行ってきまーす」

「おう、いってらっさーい」

美咲が出て行くのを見届け、拓斗は仏壇を見つめた。

「あれから１３年か・・・」

そう呟いた拓斗の目は、仏壇ではないどこかを見つめているようだった。

序章（後書き）

時間がある時に書きますので、期間が空くことがあります

序章2

「あれ？」

いつもの通学路に見慣れない光景があった。
それは台の上に水晶玉を置いていて、占いのようだった。
台の前にはフードを深く被った人が座っている。

（こんなとこにいるのも珍しいな～）

そう思いながら通り過ぎようとしたとき。

「そこの娘」
「え？」

声をかけてきたのはフードを被った人物だった。
声の嗄れ具合と高さからして、老婆のようだ。

「私・・・ですか？」
「お主以外に誰もいないじゃないか」

確かに美咲以外に歩いてる人はいない。

「あの、何か御用ですか？」
「悪いオーラが出ている、今すぐ家に帰ったほうがいい」
「悪い・・・オーラですか？」

占いは信じる方だが、漠然としすぎているため美咲は戸惑ってしまった。

「それってどういう・・・」

美咲が詳しく聞こうとした直後、遠くでチャイムの音が聞こえた。

「やばっ！もうそんな時間！？
私、学校行かなきゃならないんで失礼します！」

そう言い残して美咲は走り去った。

「・・・困ったことになった・・・」

老婆はそう呟くと、占い道具を片づけ始めた。

序章３（前書き）

序章の終章です

序章3

「あれ？ユキ？」

チャイムが鳴ったにも関わらず、前を歩いている親友の雪穂を見つけた。

「あ、ミサ、おはよう」

「おはよう、チャイム鳴ったのに歩いててていいの？

優等生が遅刻なんてさ」

雪穂は美咲を見つめポカーンとしている。

「ミサ、まだ２０分だよ？

それに、さっきのチャイムは近くの小学校だよ」

「え？」

美咲は自分の腕時計を見た。

確かに時計は２０分を指している。

朝のＨＲは４０分からだ。

「あ・・・ホントだ」

☆★☆★☆★

「遅いなぁ」

担任が出席を取り始めたにも関わらず、美咲のもう一人の親友はまだ来ない。

「いつものことでしょ？」

雪穂は呆れた顔をしている。

「まぁそうだけど・・・」

美咲が言うと同時に教室の後ろのドアがゆっくり空いた。
どうやら担任に気付かれないようにしているようだ。

「山口ー、ＨＲ始まってるんだから早く席に着けよー」
「はーい」

ドッと教室で笑いが起きた。

「あーあ、ギリギリセーフだと思ったのにな～」

そう言って山口絵里香は席に座った。

「エリは遅刻が当たり前なんだね」

美咲はもう一人の親友である絵里香に笑いながら言った。

「だって、化粧が決まんなくてさ～」
「化粧なんかしてくるからでしょ？」

雪穂は完全に呆れている。

第一話

「ミサ～もちろんカラオケいくよね？」

絵里香は帰りのＨＲが終わった直後に満面の笑みで言った。

「ごめん、この後夕飯の買い物行かなきゃ」

美咲は申し訳なさそうに両手を合わせた。

「そっかぁ、主婦は大変だね～」

絵里香はうんうんと頷いている。

「エリも少しは見習えば？」

雪穂は少しトゲを含んだ言い方をした。

「無理無理、学生の仕事は遊ぶことだし」

「はぁ～」

雪穂はため息をついた。

「じゃあ、また明日ね」

美咲は話を切り上げて、手を振りながらその場を後にした。

☆★☆★☆★

「今日は何を作ろうかな～」

美咲は夕飯の献立を考えながらスーパーに向かった。

「春だしタケノコでも使って・・・ん？何の音だろ？」

突然空気を裂くような高い音が美咲を襲った。

「こっちに向かってきてる？」

「危ない！」

声と同時に美咲は抱きかかえられ、体が宙に浮いた。

ドゴーンという爆発音と共に、美咲がさっきまで立っていた場所のアスファルトが砕けた。

もし、この人物に助けられなければ美咲は跡形も無かっただろう。

「えっ、何！？」

美咲を助けたのは朝に声をかけてきた老婆だった。

「おばあさん！？なんで・・・」

「外れちゃったか～」

美咲の声を遮るように上空から声がした。

「え、と・・・飛んでる？」

美咲は自分の目を疑い、座り込んでしまった。

「レギノスか・・・」

老婆は苦虫を噛み潰したような顔をしている。
「俺のことを知っていたか、嬉しいねぇ」
レギノスと呼ばれた男はニヤニヤしている。
「ふん、お前がこっちに来るとはな」
「え？え？」
美咲は状況がつかめず戸惑っている。
「美咲、早く逃げなさい！」
「おばあさん、なんで私の名前を？」
美咲は今朝会ったばかりの老婆に名前を呼ばれ、さらに混乱してしまった。
「俺が逃がすわけ無いだろう？」
そう言うと、レギノスは勢いよく美咲に向かって突っ込んでくる。
「美咲には指一本触れなせない！」
どこからともなく、老婆の手に杖が現れた。
その杖の先端から炎のようなものが出て、レギノスに飛んでいく。
「くっ！！」
炎はレギノスに当たると、さらに激しさを増した。

「伝説の大魔術士と言われるだけあるな、凄まじい威力だ」
炎の中からレギノスは姿を現した。
「逃げなさい、美咲！」
「あ、は、はい！」
美咲は立ち上がり、駈け出した。
「おいおい、俺が一人でこの世界に来ると思うか？」
レギノスが指を鳴らすと、老婆の後ろから美咲の悲鳴が聞こえた。
老婆が勢いよく振り返ると、美咲が兵士の恰好をした男に捕まっている。
「おっと、動くなよ？
動いたらお前の大事な孫娘がどうなるかわからないぞ？」
「・・・えっ？」
美咲はレギノスの言葉に固まってしまった。
レギノスはゆっくりと老婆に近寄っていく。
「俺の目的はアンタの持ってる杖だが、アンタを生かしておくという命令は聞いてない」
ドスッという鈍い音が響いた。
レギノスが離れると老婆は倒れこんだ。
「お・・・ばあ・・・ちゃん？

いっ・・・頭が！」

そう言った直後、激しい頭痛が美咲を襲った。

第一話（後書き）

アクセスが増えてきて嬉しいです。
初心者なので、変なところがあれば教えて頂きたいです。

第二話

「ねぇ、なんでおばあちゃんはたまにしか会えないの？」

小さいころの美咲は手を繋いでいる祖母に訪ねた。

「おばあちゃんはね、困った人を助けるお仕事をしてるんだよ」

祖母は優しい笑顔で答えた。

「すごーい！美咲も大きくなったらおばあちゃんみたいな仕事したい！」

「そうかい、ありがとう美咲」

☆★☆★☆★

「今のは、おばあちゃんと・・・小さい頃の私？」

昔の記憶が蘇ると頭痛が治まってきた。

辺りを見回すと、血を流して倒れている祖母が視界に入った。

「おばあちゃん！！」

叫ぶと徐々に美咲の記憶が薄れていった。

「な、なんだこの魔力は！？」

レギノスは、兵士に捕まりうなだれている少女から発せられている魔力に驚いた。

「これが大魔術士の血筋か！」

美咲が纏っている魔力が爆発すると、兵士が後ろに吹き飛んだ。

「よくも・・・おばあちゃんを！！」

美咲が手を上にかざすと、老婆の手元にあった杖が引き寄せられるように美咲の手に収まった。

「なっ、杖が！まずい！」

美咲の杖に魔力が集まっていく。

「くそ！退くぞ！」

レギノスは宙に浮くと、姿が見えなくなり、倒れていた兵士もフラつきながら消えた。

「あれ、私・・・おばあちゃん！」

美咲が我に返ると、纏っていた魔力も消えた。

倒れている祖母に走り寄る。

「おばあちゃん・・・おばあちゃん！」

「み・・・さき」

「なんで、実のおばあちゃんだって言ってくれなかったの？」

「お前を・・・巻き込みたく無かったんだよ」

そう答える祖母の顔は、昔と同じ優しい笑顔だった。

「美咲、よく聞きなさい」
「しゃべっちゃダメだよ！」
「いいんだよ、もうすぐ・・・消えちゃうんだからね」
「消えるって・・・」
「奴らはあんたの顔を知ってしまった・・・
幸い、奴らはしばらく間のこっちの世界には来られない」

祖母の呼吸が浅くなっていく。

「その間に杖を持ってどこか安全な場所に隠れなさい
そうすれば・・・が・・・なんとかしてくれるからね」
「おばあちゃん？何、よく聞こえないよ？」
「最後に・・・美咲の顔が見れて良かった・・・」

徐々に体が透けていく。

「おばあちゃん、おばあちゃーん！！」

祖母の姿は完全に消えてしまい、人通りの少ない道に美咲の声だけが響いた

第三話

「ただいま・・・」
「おう、おかえり・・・ってどうしたんだ？」

いつもと違い、元気が無く自宅に戻ってきた妹に疑問を投げかけた。

「・・・お兄ちゃんは知ってたの？
おばあちゃんが生きてたってこと・・・」
「何言ってるんだ、この前北海道に行ったとき会ったじゃないか？」
「違う！お母さんのお母さんだよ！」

美咲は母方の祖母は亡くなったと兄に教えられていた。

「・・・疲れたろ？休んだ方がいい」
「話を・・・！」

逸らさないでと言おうとしたが、なぜか体が重たい。

「うん、少し休むね」

また後で聞けばいい、そう思い部屋に入っていった。

「あいつの持ってた木の棒って・・・まさかな」

気のせいだろうとテレビに向きなおった。

☆★☆★☆★

「う・・ん・・・」

美咲が目を覚ますと外は暗くなっていた。

「あれ？少しのつもりだったのに」

部屋を出ようとしたそのとき。

〜お・・・い〜

「え？」

辺りを見回したが、もちろん人がいるはずがない。

「気のせいだよね」

〜おい、こっちだ〜

よくみると、祖母の杖がうっすらと輝いている。

「もしかして・・・」

〜そうだ、私だ〜

「つっ、杖がしゃべってる！？」

〜正確にはお前の頭に直接語りかけている〜

「そんなこと・・・あるんだ」

〜ああ、ようやくお前の魔力とシンクロすることができた〜

「あなたは一体・・・？」

〜私はヴォイド、杖に宿る人格だ〜

美咲はイマイチ信じられなかったが、今まで起こった出来事を考えれば信じざるを得ない。

〜お前、かたき討ちしたいんだろう？〜
「な、なんで？」
〜魔力がオーバードライブしたんだ、それぐらいわかる〜
「・・・なんかよくわかんないけど、襲ってきた人たちのこと知ってるの？」
〜ああ、あいつらはもうひとつの世界、つまり異世界から来た連中だ〜
「異世界か・・・でもね、私はかたき討ちがしたいわけじゃないよ」
〜なんだと？憎くないのか？〜
「確かに憎いよ、でも、そんなことしたらレギノスって人とやってることは同じになっちゃう。
そんなことおばあちゃんは望んでないと思うの・・・だから私は直接会って話をしたい。
なんであんなことをしたのか聞きたい！」
〜ふ、変わった奴だな・・・まぁお前の好きなようにすればいい〜
「あ、でも学校あるから休みの日じゃないと・・・」
〜その心配は必要無い、向こうの時間経過は非常に遅い〜
「そっか、じゃあ着替えてから行くね」
〜ああ・・・わかった〜
「あ、やっぱお兄ちゃんの顔見てからでいい？」
〜・・・準備ができたら声をかけろ〜

☆★☆★☆★

「あれ？寝てる？」

部屋から出た美咲は、ソファーで居眠りをしている兄を見つけた。

「・・・お兄ちゃん、行ってきます」

美咲は寝息を立てている兄の耳元で囁いて、部屋に戻った。

第四話

「でも、どうやって異世界に行くの？」

部屋に戻り、着替えを終えた美咲はヴォイドに話しかけた。

〖私が異世界へ座標を合わせる、お前は私に魔力を送ればいいだけだ〗

「送ればって・・・そもそも私に魔力なんてあるの？」

〖お前、覚えて無いのか？〗

「何を？」

〖まぁいい、簡単にいえば神経を手先に集中させるということだ〗

「わかった、やってみる」

美咲は目を閉じ、杖を持っている右手に神経を集中させた。

すると美咲は宙に浮いたような感覚を覚えた。

☆★☆★☆★

〖着いたぞ〗

「え？」

目をあけると、そこには港町が広がっていた。

美咲が立っている場所は風通しの良い高い丘だった。

「わー、すごい景色！」

〖ここがもう一つの世界だ〗

「へー、なんかすごい平和そうだけど・・・」

〖この地域は比較的に連中の手が及んでないからな〗

「じゃあ街に入ってもいいよね？」

そう言うと美咲は丘を降りていった。

☆★☆★☆★

「すごーい、なんかパリみたいでオシャレ！」

美咲は街に入ると、はしゃいでいる。

「ここって、服屋あるかな？」

〜喜ぶのは勝手だが、私の声はお前にしか聞こえてないからな〜

「え？じゃあ街の人には大声で独り言いってるように見えてるの？」

〜ああ、そういうことになる。あと声に出さなくても、念じれば私に伝わるからな〜

（そういうことはもう少し早く言ってよ！）

街の人にどういう風に見られたのかと思うと、美咲は赤面した。

☆★☆★☆★

「ん？なんだろ？」

しばらく歩くと怒声のようなものが聞こえてきた。

〜おい、余計なことして面倒事に巻き込まれるなよ〜

（大丈夫、見に行くだけだよ）

近づいてみると、店の主人と大男が言い争っているようだ。

「客が店に入っちゃいけねぇのかよ！」
「そうではなく、あなたが入ると他のお客の迷惑になるんですよ」
「なんだと！？」

男は今にも華奢な主人に殴りかかりそうだ。

「むぅ、あの人！」

美咲は主人と男の間に割って入った。

「あの！お店の人困ってるじゃないですか！」
「あ？なんだ嬢ちゃん、邪魔すんじゃねぇ！」
「お酒のにおい？昼から酔っ払って絡むなんて、恥ずかしくないんですか！？」
「ぐっ！おい嬢ちゃん、きれいな顔に傷がついてもいいのか？」

男が威嚇をして、顔を近づけたとき。

「あんた！何やってんだ！」

男の妻が阿修羅のような顔で近づいてくる。

「げっ」

さっきまでの勢いはどうしたのか、男は縮こまっている。

「ごめんねお嬢ちゃん、うちの主人が迷惑かけて」
「いえ、大丈夫ですよ」

美咲は笑顔で答えた。

「そう言ってくれると嬉しいよ。あんた、帰るよ！」
男の襟を掴んで男の妻は去っていった。
『お嬢ちゃん、すげぇなー！』
『肝が据わってるよ！』
いつのまにか野次馬が集まっていたようだ。
「ありがとう、助かったよ」
店の主人は安堵の表情を浮かべている。
「いえ、私は別になにも・・・」
「いやいや、君が間に入らなければ僕は殴られていたかもしれないしね」
確かにあの勢いだと主人は殴られていただろう。
「お礼にうちのケーキでも食べてくれないかな？」
「そんな、お礼だなんて・・・じゃあお言葉に甘えて」
断ろうと思ったが、甘党の美咲には断り切れなかった。

第五話（前書き）

お気づきの方もいらっしゃると思いますが、第四話が第七話となっていました。混乱した方々、申し訳ありませんでした。

第五話

「うん！すごい美味しいです！」

店の主人に店内に入れてもらった美咲は木製の椅子に座り、嬉しそうにケーキを頬張っている。

「そうかい？店で作ってる自慢のケーキなんだよ」

主人は誇らしげに笑っている。

〜まったく、余計なことをするなと言ったのに〜

（まぁ、結果的に良いことしたんだからいいでしょ？）

〜・・・〜

美咲はあっというまにケーキを平らげてしまった。

「ごちそうさまでした、ホントにおいしかったです！」

「はは、あんなに美味しそうに食べてくれたのは君が初めてだよ」

「あ、あはは・・・」

そんなにがっついていたのだろうかと思うと、美咲は恥ずかしくなってしまった。

「でも、なんでケーキ屋さんに酔った人が来たんですか？」

美咲は話を逸らそうと、口を開いた。

「いや、うちはケーキ屋ではなくカフェなんだよ。

経営が苦しくなってきたから、お酒も始めたんだ」
主人の表情が少し曇ったように、美咲には見えた。
「なにかあったんですか？」
「おや、君はこの街の人ではないのかい？」
「はい、なのでこの辺のことがよくわからなくて・・・」
「この街はね、漁業で有名な街だったんだ」
主人は少しうつむき気味に話し始めた。
「でも、魔王軍のレギノスって奴が船を全部壊していったんだ」
「レギノス！？」
美咲の祖母を襲ったあの男だ。
「魔王の命令で船を壊しに来たんだ。
船は戦いの道具にもなる、反乱を抑えるためにもあってはいけないってね」
「そんな・・・」
「さっきの酔っ払いは漁師だったんだが、船が壊されて仕事が無くなってしまった。
だからやけ酒をしているのさ」
「そうだったんですか、それも知らないで私ひどいことを・・・」
「気にすることは無いさ。
そして、船が壊された影響で店に客もめっきり来なくなってしまったんだ」
「そうですか・・・」
話し終わると主人はため息をついた。

「そういえばまだ名前を聞いていなかったね」
主人は思い出したように、話を切り出した。
「あ、美咲といいます」
「美咲？変わった名前だね」
「そ、そうですか？」
「あれ、でも街はずれに似たような名前の人が住んでいたな」
「街はずれですか？」
「ああ、なんで街に住まないかは知らないけどね。
会いに行くなら街を出て、北に行けば家があるはずだよ」
「ありがとうございます、行ってみます」
もしかしたら自分の知り合いかもしれない。
とりあえず行ってみようと、席を立った。
「またいつでもおいで、ケーキを用意して待ってるからね」
「はい、ケーキごちそうさまでした」
「気をつけて行くんだよ」
見送る主人に手を振りながら、美咲は店をあとにした。

第六話

主人に言われた通りに、街を出て北に進むと森に囲まれた砂利道に出た。
その道を進みながら、美咲はパンプスではなく、スニーカーを履いてきて正解だと思った。

「魔法ってどうやって使うの？」

美咲は今まで一度も自分の意思で魔法を使ったことが無いので、使い方を知らなかった。

〜そうだな、魔物と会うこともあるかもしれないし、そろそろ教えておこう〜
「え？魔物ってそこら辺にいるものなの？」
〜ああ、ここら辺はいないみたいだがな〜
「やだな〜、魔物っていっても生物の命を奪うわけでしょ？」
〜ふ、とんだお人好しだな。心配するな。
魔物は魔界から来ていて、倒しても魔界に送り返されるだけだ。〜
「そっか、なら安心だね」

ヴォイドは、こんなので大丈夫かと不安になってきた。

〜それで、魔法の使い方だが至って簡単だ。
この世界には目に見えない精霊や元素がそこら中に存在している。
そいつらを従えて、力を借りるんだ。〜
「なるほど」
〜今のお前の魔力では、元素が精一杯だろうな。
だが、お前は魔術師の孫娘というだけあって、相当な魔力を秘め

ている。
経験を積めば魔力が解放されて、強力な魔法が使えるようになるだろう〜
「お婆ちゃんのお陰ね・・・」
〜そうだ、使い方はお前の頭に直接教えてやろう〜
すると、美咲は頭の中に何かが流れ込んでくる不思議な感覚にとらわれた。
「な、何これ・・・」
〜これで基本的な魔法は使えるだろう〜
「あ、ありがとう」
少しフラつきながらも、美咲は再び歩き始めた。
☆★☆★☆★
「あれ？あの子・・・」
症状も落ち着きしばらく歩くと、少女がしゃがみ込んで花を見つめているのを見つけた。
「きれいなお花だね」
少女の傍に屈み込み、花を見つめながら話しかけた。
「お姉ちゃん、だーれ？お兄ちゃんのお友達？」
大きな瞳が印象的な少女だった。
色白で華奢な体つきをしており、年齢は小学生ぐらいだろうか。

「ううん、違うよ。
お姉ちゃんは色々なところを回って、旅をしてるの」
こんな少女に魔王軍を探しているなんて言えるはずが無かった。
「ホントに！？」
大きな瞳を輝かせて、見上げてくる。
「そうだよ」
「凛もお姉ちゃんと一緒に行く！」
「え？」
凛という少女は美咲の服の裾をしっかりと掴んだ。
「あのね、旅って危険なんだよ？
それにお父さんとお母さんが心配するし・・・ね？」
凛はうるうるとした瞳で美咲を見つめている。
「お姉ちゃんは凛のこと嫌いなの？」
「いや、そうじゃなくて・・・」
どうすればいいかわからず、美咲は困惑してしまった。

第七話

「凛、無理を言うんじゃない」
「お兄ちゃん」

困惑している美咲とわがままを言っている妹を見つけて、青年が声をかけてきた。
年齢は美咲と同じくらいだろうか。

「それに、初めて会う人に対して言うことじゃないだろ？」
「ぶー、つまんない！」

凛は頬を膨らませ、花を摘もうと花壇に走っていった。
その姿を見送った青年は美咲の方に振り返った。

「うちの妹が迷惑をかけたね」
「いえ、あなたは？」
「俺は恭輔、凛の兄だ。君は？」
「美咲です、はじめまして」

美咲は笑顔で挨拶をした。

「美咲？もしかして君は日本から？」
「はい、そうですけど・・・」
「へぇ、家族以外の日本人と会うのは初めてだ」
「そうなんですか？」
「ああ、ほとんどはこの世界で生まれ育った人ばかりなんだ」
「じゃあなんで・・・あれ、凛ちゃん？」

美咲の視界に、花の近くで胸を押さえて倒れている凛が見えた。
「凛ちゃん、どうしたの！？」
美咲は凛に駆け寄り、声をかける。
恭輔も後を追って、走ってきた。
「凛！あれだけ走り回るのは控えろと言っただろ！」
「どういうことですか？」
「凛は病気で、運動は控えなければいけないんだ」
「病気？」
美咲は無意識に、手を凛の胸元に添えた。
すると呼吸が荒く、苦しそうだった凛の表情が穏やかになった。
｛治癒魔法だと？私は教えていないぞ。
とっさに思いついたということか？｝
「今のは・・・魔法！？」
ヴォイドの呟きは恭輔の声にかき消され、美咲には聞こえなかった。
「あ・・・使っちゃった」
美咲はヴォイドに言われていたことを思い出した。
☆★☆★☆★
｛魔法の使い方は教えたが、あまり人前で使うんじゃないぞ｝

頭痛でフラついている美咲にヴォイドは忠告した。

「え、なんで？」

〜魔法使いというのは珍しく、何かされるかもしれない。
それに、どこに魔王軍がいるかもわからないしな〜

「そうなんだ、じゃあ杖持ってたら余計バレるんじゃないの？」

〜ああ、だから使わない時は姿を変えているんだ〜

するとヴォイドは白く光り始めた。
光が収まると杖は無くなり、美咲の指に指輪がはまっていた。

「指輪？」

〜そうだ、使える魔法は限られてくるが、
この姿なら見破られることは無いだろう〜

「わー！キレイ！」

美咲は手を空にかざし、指輪に見とれている。

〜お前の意思で自由に姿を変えられるからな。
使いたい時は念じればいい〜

「うん・・・そういえば、ずっと思ってたんだけど」

〜なんだ？〜

「お前じゃなくて美咲なんだけど？」

〜お前みたいな未熟者はお前で十分だ〜

「なんか・・・嫌」

☆★☆★☆★

「君は・・・魔法使いだったのか」

初めて見る魔法に、恭輔は呆気に取られてしまった。

「いや、あの、これは・・・」

〜・・・お前は本当に人の話を聞かないんだな〜

街での一件を思い出し、ヴォイドはため息をついた。

恭輔は凛に近寄り抱きかかえると、美咲の方を振り返った。

「美咲、俺に付いてきてくれないか？

凛のことでお礼がしたいんだ」

「は、はい」

急に名前で呼ばれて、情けない返事をしてしまった。

「恭輔さん、どこに行くんですか？」

「俺の家だよ。それと、俺のことは恭輔でいいし、

敬語じゃなくてもいい」

そう言って美咲に微笑むと、家に向かって歩き始めた。

断る理由も無いので、美咲は恭輔の後に付いていった。

第八話

「ここが家だ」

恭輔に案内されて着いた場所は、何の変哲もない二階建ての一軒家だった。

玄関の近くには畑もあり、野菜を育てているようだ。

「私も入っていいの？」

「ああ、親にも報告したいしな」

両親へのご挨拶のようで、美咲は変な感じだった。

☆★☆★☆★

「ただいま」

「おかえりなさい、早かったわね」

玄関に入ると奥から恭輔の母が出てきた。

人の良さそうな顔立ちだった。

「あら、その子は？」

「ああ、家の近くで会ったんだ。

話すと少し長くなる」

「ちょ・・・ちょっと、あなた！恭輔が女の子を！」

恭輔の母は慌てて夫を呼んだ。

「どうした？大声を出して」

急に呼ばれた恭輔の父は小走りで出てきた。
非常に真面目そうな父だ。

「お、おじゃまします」

美咲は恭輔の両親の勢いに圧倒されてしまった。

「恭輔・・・お前、こんな可愛い女の子を連れてくるなんて」
「父さん、それどころじゃないんだ」

恭輔は後ろを向き、背負っている凛を見せた。

「凛！また発作が起きたのね？」
「ああ、母さん頼むよ」
「わかったわ」

恭輔は背負っている凛を母に預けた。
凛を抱きかかえた恭輔の母は、二階に上がって行った。

「父さん、話したいことがあるんだ」
「ああ、その子は？」

恭輔の父は息子の後ろにいる美咲に視線を向けた。

「はじめまして、美咲といいます」
「美咲が凛の発作を抑えてくれたんだ」
「ほぉ・・・まあ上がりなさい」
「はい、おじゃまします」

美咲は、またヴォイドに言われるだろうと思いながら、家に上がった。

☆★☆★☆★

「ほぉ、治癒魔法でな～」

恭輔の父は頷きながら言った。

「はい、私もよく覚えてないんですけど」
「でも凛の病気は治らないんだろ、父さん？」
「ああ、医者が言うには今までに無い症状みたいだからな。魔法でも治るかどうか・・・」

息子の問いに、父は渋い顔で答えた。

「凛ちゃんはいつから病気なんですか？」
「生まれたときからだよ、今でも治療法を探しているんだが」

恭輔の父は目を閉じて、首を横に振った。

「地下の書庫に手掛かりがありそうでも、文字が読めないんだ。もう使われていない文字ばかりでね」
「地下・・・あの、私も見させてもらってもいいですか？」
「ん？ああ、廊下に降りる階段があるから好きに使ってくれて構わないよ」

恭輔の父は廊下を指差すと、ちょうど二階から恭輔の母が降りてきた。

「母さん、凛は？」
「ぐっすり眠ってるよ」
恭輔の問いに、母は微笑んで答えた。
「じゃあ、今ご飯作るからね」
「あ、私も手伝います」
「あら、助かるわ」
美咲は、台所に向かう恭輔の母に付いていった。

第九話

「うむ、うまい！」

食卓に運ばれた料理を食べて、恭輔の父は声をあげた。

「それは美咲ちゃんが作ったのよ」

恭輔の母がお盆に乗せたお茶と酒を置いていく。

「お口に合って嬉しいです」
「ほお、凛にも食べさせてやりたいな」
「凛ちゃんはまだ起きないんですか？」
「凛は発作が起きると一日中寝てしまうんだ」

美咲の問いに恭輔は答えた。

「そうなんだ・・・」
「いやーそれにしても、うまいな」

恭輔の父は料理にがっついている。

「美咲ちゃんが手伝ってくれて本当に助かったわ」
「そうだ、美咲ちゃんさえ良ければずっとこの家にいていいんだぞ？」
「え？」

酔っているのか、恭輔の父は声が大きくなっている。

「そうよ、恭輔のお嫁さんになってくれれば私も安心だわ」
「あ、あはは・・・」
美咲は俯いてしまった。
恭輔は生まれて初めて、親を鬱陶しいと思った。

☆★☆★☆★

「恭輔、お父さんを部屋に運んでおいて」
「わかった」

恭輔は酔い潰れて寝てしまった父親を部屋に運んでいった。
美咲はきれいに平らげられた皿を片づけていた。

「美咲ちゃん、そこまでしなくてもいいのよ？
お客さんなんだから座ってなさい」
「わかりました、じゃあこれを片づけたらそうしますね」

恭輔の母は椅子に座ってお茶を飲んでいる。
美咲も台所から戻ってきて、向かい側に座った。

「美咲ちゃんは家でも料理してるの？」
「はい、兄と二人暮らしで私がしなければならないので」
「あら？ご両親は？」
「二人とも事故で亡くなったんです・・・」
「そう・・・寂しくないの？」
「兄がいますし、話を聞いてくれる友人もいますから。
でも・・・楽しそうに歩いてる家族を見ると羨ましいなって思います・・・」

美咲の表情が少し曇った。

「私でよければ母親の代わりになるからね」

恭輔の母は優しい笑顔で言った。

「ありがとうございます・・・お母さん」

美咲は心が温かくなった気がした。

第十話

「ん？母さん、美咲は？」

父親を部屋に運んで、居間に入ってきた恭輔は母親に聞いた。

「ああ、調べたいことがあるって地下に行ったわよ」

「そうか、じゃあ俺は凛の様子見てくる」

「頼むわ」

恭輔はお茶を一口飲むと、再び二階に上がっていった。

☆★☆★☆★

「わー、すごい量！」

地下の書庫に入った美咲は声をあげた。

そこは本棚が列になっており、どの本棚も一杯だった。

〔おい〕

「あ・・・な、何？」

絶対に怒られると思った美咲は、動揺した。

〔随分と時間を食ったな〕

「そ、そうだね」

〔そして今お前は何をしようとしている？〕

「いや・・・別に何もしないよ？」

〔あの娘の病気を調べようとしているだろ〕

図星だった。

〜調べてどうするつもりだ？〜

「あの・・・私にもなんかできないかな〜って」

〜お前は・・・〜

ヴォイドは怒りというより呆れている。

これで何度ヴォイドに呆れられたかわからない。

「まぁとりあえず調べてみるだけだし、ね？」

〜好きにしろ〜

了解を得た美咲は、とりあえず近くの本棚から手をつけた。

「あれ、この本・・・」

他の本に比べて、新しい本を手にとった。

「この文字、なんでかわからないけど読める」

〜それは私の魔法だ〜

「え、そうなの？」

〜ああ、街で話をすることができたのも魔法の効果だ。

そうしないと先に進めないからな〜

「魔法って何でも出来るんだね」

本を捲っていくが、病気に関することは書いていなかった。

「違う所探そうかな」

奥の方にいくと分厚い本が並んでいる。
手に取ると、病気の症状などを書いている本のようだ。
「これは・・・医学書？」
よく見ると棚の本は全て医学書だった。
「この棚かな」
分厚い医学書を持てるだけ持ち、近くにあるソファに座った。
〔全部読むつもりか？〕
「凛ちゃんと同じ症状の病気が、見つからなければそうなるかもね」
そう言うと、美咲は医学書に目を通し始めた。

☆★☆★☆★

「・・さ・・き」
「う～ん」
「おい、美咲」
「ん～？」
美咲は声が聞こえて、目を開けた。
どうやら見ている間に寝てしまったようだ。
恭輔が見下ろしている。
「上がってこないから見に来たんだ。もう朝だぞ」
「え！？」

勢いよくソファから上体を起こした。

「随分たくさん読んだな」

恭輔はソファの向かいにある椅子に座り、積み重ねられている本を手に取った。

表紙を見ると、額に皺がよった。

「なんだこれは？」

「それは薬草学の本だよ」

「古代文字が読めるのか？」

「まぁ、一応ね」

ずっと字を見ていたせいで、少し目が痛む。

「なにかわかったのか？」

「うん、もしかしたら凛ちゃんの病気が治るかも」

「凛が？」

恭輔は目を見開いた。

「そう、山に生えてる薬草らしいんだけど、場所がわかんなくて」

「名前はわかるのか？」

「確か、タリス山だったはずだよ」

「タリス山・・・あそこか」

恭輔は場所を思い出し、苦い顔をした。

「あれ、知ってるの？」

「ああ、魔物が出るから今は立ち入り禁止になってる」

「そっか、でも凛ちゃんのためだしね」
美咲は立ち上がり、本を仕舞い始めた。
「まさか、行く気か？」
「だって治るかもしれないんだよ」
「そうだけど、魔物が出るんだぞ？」
「大丈夫、なんとかなるよ」
美咲は振り返り、笑った。
「わかった、でも俺も一緒に行く」
「え？」
「美咲一人で行かせるわけにはいかない。
それに、自分の妹のことなのに待ってることなんてできない」
「ありがとう・・・恭輔」
「とりあえず、朝飯を食ってから考えよう」
「うん」
二人は階段を上がっていった。

第十一話

朝食を摂るために、居間に入った美咲と恭輔は椅子に座った。
食卓に凛の姿はなく、まだ起きられないようだ。
二人が椅子に座ると、食事が運ばれてきた。

「タリス山に行こうと思うんだ」

恭輔は母親が座ると同時に切り出した。
二人が来るより先に、椅子に座っていた恭輔の父は険しい顔で恭輔を見た。

「あそこは立ち入り禁止のはずだぞ」
「知ってる、でも行かなきゃ駄目なんだ」

恭輔の母は不安そうな顔で恭輔を見つめている。
夫の様子を見ながら口を開いた。

「あそこは魔物もでるのよ？そもそも何をしに行くの？」
「凛の病気を治すためなんだ」

恭輔の父は机を叩いた。
母はびくっと体が震えた。

「お前一人で何ができるんだ、危険すぎる！」
「一人じゃない、美咲も一緒だ」
「だったら尚更だ、昨日会ったばかりの女の子を連れていくなんて・・・」
「私は大丈夫です、それに私が言いだしたことなんです」

美咲は身を乗り出して言った。
自分が言いだしたことで恭輔ばかりに責任を負わせてはいけないと感じたからだ。

「なんだって？」

恭輔の父は美咲を見た。
息子ではなく、巻き添えを食ったと思っていた女の子が言い始めたとなったら、話は変わってくる。

「昨日調べた本に書いてあったんです。
タリス山にある薬草は万病を治すと」
「そうだとしても・・・」
「父さん、美咲は俺が絶対に守る。
だから行かせてくれ！」

状況を知らない人が聞けば勘違いしそうな内容だが、今はそんなことを言う人物はいない。

「わかった・・・そこまで言うなら止めない。
それにお前は頑固だから、止めても行くだろう。
でも条件がある」

恭輔の父は真剣な顔で恭輔を見た。
母は横で事態の成り行きを見守っている。

「必ず生きて帰ってこい、いいな？」

父の表情は柔らかくなっていた。

恭輔は無言で、深く頷いた。

☆★☆★☆★

「はい、お弁当。途中で食べなさい」

玄関の前で、母は息子に弁当箱の入った鞄を手渡した。

恭輔は大剣を背負い、上着の中に頑丈な鎖帷子を着込んで、戦闘準備は万端だ。

「ありがとう、母さん」

恭輔は鞄を受け取り、美咲に手渡した。

「美咲が持っててくれないか？」

「うん、わかった」

美咲は恭輔が鞄を背負うことが出来ないのを察して、鞄を受け取った。

「気をつけるんだぞ」

父は恭輔と美咲の肩に手を置いた。

「ああ、行ってくるよ。父さん」

「行ってきます、お父さん」

恭輔は後ろを向き、歩き始めた。

美咲も頭を下げて、恭輔の後を追った。

「無事に帰ってくるかしら」

母は不安そうに、目で二人の後を追った。
父は母の肩を抱き寄せ、頷いている。

「大丈夫さ、あいつはそこそこ腕は立つし、美咲ちゃんも付いてる。
必ず帰ってくるさ」

両親は、小さくなっていく二人の姿が見えなくなるまで見送った。

第十二話（前書き）

今回は話の切れ目があるので、短くしました。

第十二話

森に囲まれた一本道を抜けると、美咲と恭輔は風が吹きっさらしの草原に出た。
遠くに小さな山が見える。

「あれがタリス山だ」

恭輔に言われ、美咲は山を見つめた。
思っていたよりも小さく、一日もあれば帰ってこれそうな高さだった。

「ここら辺に魔物はいないの？」

横を歩いている恭輔を見上げ、尋ねた。

「ああ、山に登らない限りはな。
山には結界が張ってあるから、山から下りてくることもない」
「へー、意外と安全なんだね」

美咲はそこら中に魔物が歩き回っている光景を想像していたので、意外だった。

「暗くなると面倒だから急ぐぞ」

そう言うと恭輔は早足で山に向かった。
美咲は頷くと、恭輔の後に続いた。

☆★☆★☆★

「着いたね」

美咲は山に着くと、上を見上げた。

近くに来てみると、山は思っていたよりも高かった。

山からは邪悪な気のようなものを感じた。

「ここの魔物はそこまで強くはない。

でも、油断はするなよ」

「うん、わかってる」

美咲は恭輔の言葉に答えはしたものの、これからどんな目に会うかと考えると胸の鼓動は激しくなった。

大丈夫、なんとかなる。美咲は自分に言い聞かせ、山に登り始めた。

第十三話

何かに遭遇することもなく、美咲達は山の中腹ぐらいまで到達した。

「何もいないね」

「そうだな、魔物がいなくなったのか？」

そんなことあり得るはずがないと、恭輔は辺りを見回した。

すると山道に何かが転がっているのを見つけた。

「あれは・・・」

恭輔が様子をうかがっていると、美咲はそれに近づいて行った。

無防備にも程がある。

「おい、無暗に近づいたら」

恭輔が制止しようとすると、美咲が悲鳴を上げて後ずりした。

恭輔は美咲の隣に駆け寄った。

転がっていたものは頭蓋骨だった。

「ここ、これって・・・頭！？」

「落ち着け、これは骨格からして鳥だ」

恭輔は石につまずき、尻もちをついている美咲に言った。

だが、なぜ鳥の頭があるのだろう。

鳥型の魔物なら体力が尽きれば魔界に送り返される。

魔物は人を襲うが、鳥を襲うとは聞いたことが無い。

「・・・なにが起きているんだ」
「恭輔？どうしたの？」
美咲は不思議そうに恭輔の顔を覗き込んだ。
「なんでもない、先を急ごう」
恭輔は自分の考えが当たっていないことを祈った。
美咲は首を傾げながら、先に進んだ。
☆★☆★☆★
日が落ち始めた頃、美咲達は山頂に着いた。
「着いたね」
美咲は額の汗を拭い、辺りを見た。
岩の陰に、草が生えているのが見える。
「あ、あれかな？」
美咲は薬草に近づいていった。
恭輔は離れた所から、慎重に周りの様子をうかがっている。
すると、足元に一瞬巨大な影が見え、恭輔は瞬時に頭上を見上げた。
「なんだ？」
上空には巨大な鳥が飛行している。

尖ったクチバシで、足は鋭い爪をしている。
翼は体の何倍もあり、全長は十メートル近くある。

「美咲！下がれ！」
「え？」

美咲は恭輔の声に反応して、恭輔の方に振り向く。
巨大な鳥は美咲の背後に降り立った。
強風を感じて、美咲は勢いよく後ろを振り返った。

「魔物！？」

鳥が翼を羽ばたくと、美咲の体が吹き飛ばされた。

「きゃあ！」
「美咲！」

恭輔は、飛ばされた美咲を受け止めた。

「ありがとう、恭輔」
「ああ」

鳥は二人を向いて鳴いている。
敵だと認識されたようだ。

「俺が奴を引きつける、美咲は魔法で狙ってくれ」
「うん、わかった」

恭輔は背負っていた大剣を抜き、両手で持った。
美咲は前に手を出すと、指輪が光り、杖が現れた。

「行くぞ！」
「オッケー！」
恭輔は敵に向かって走り出した。

第十四話

「はぁ！」

恭輔は威嚇してくる魔物に切りかかる。
上から振り下ろした斬撃は、魔物の腹に当たった。
悲鳴を上げてよろめいた魔物は、恭輔を睨みつけ飛行した。
攻撃を予測した恭輔は大剣を横にして防御の姿勢をとる。
魔物は攻撃が防がれることを察して、翼を羽ばたかせて、突風で恭輔を吹き飛ばす。

「ぐっ！」

吹き飛ばされた恭輔は岩にぶつかり、剣を手放した。

「恭輔、大丈夫！？」

美咲は魔法を唱えるのを中断し、恭輔に呼び掛ける。
魔物は美咲の方を振り返り、飛行すると美咲の前に降り立った。

「やばっ！」

美咲が身を固めると、魔物は翼で美咲を弾いた。
美咲は地面をすべるように崖ギリギリに飛ばされた。
右腕を擦り剥き、流血している。
美咲は顔を歪ませ、苦痛に耐えている。

「痛った・・・」

痛む右腕に力を入れなおし、杖を握り直すと呪文を唱える。
「火の元素よ・・・我に従い、敵を討て！」
杖に魔力が集まると、杖の先から火の塊が魔物に飛んでいき、翼に直撃した。
魔物は痛みで頭を振り回している。
「よし、もう一回！」
美咲が呪文を唱えようとすると、魔物が振り返り、飛びかかってきた。
魔物の爪が振り下ろされたとき、恭輔が前に飛び出した。
剣と爪がぶつかり、大きな金属音が鳴り響いた。
「美咲、今だ！」
「うん！」
先ほどよりも、杖が大きな魔力を纏っていく。
「雷の元素よ・・・我に従い、敵を討て！」
杖から放たれた電撃が、魔物に直撃した。
電撃は魔物の体全体に広がっていく。
魔物は断末魔の叫びを上げて、消えていった。
「・・・倒したの？」
「みたいだな」
美咲はため息をついて、その場に座り込んだ。

恭輔は剣を納めると、辺りを見回していいる。
「やっぱりそうだったか」
「何が？」
美咲は杖を指輪に変え、恭輔を見上げた。
「魔物がいなかった理由だ。あいつが山の主で、力が強すぎたんだろうな」
「他の魔物が倒されちゃったってこと？」
「ああ、あの骨もあいつの仕業だ。あれだけデカイなら、当然だろう。
結界で出られないしな」
恭輔は何もいないのを確認すると美咲に目を向けた。
美咲の右腕から血が出ているのが視界に入った。
「お前・・・右腕が」
「平気平気、これぐらい大丈夫だよ」
美咲は肩で息をしながら、笑顔で答える。
痛みが激しいのか、少し笑顔がぎこちない。
妹のために体を張っている美咲に、恭輔は心が少し痛んだ。
「さてと・・・凛ちゃんのためにも、早く摘んで帰ろ」
美咲は立ち上がり、薬草に近づくと、しゃがみ込んで薬草を摘み始めた。
「俺は・・・何かできたのか？」

そう呟いた恭輔の声は風でかき消され、美咲に届かなかった。

第十四話（後書き）

最近は忙しく、あまり書くことができません。
期間が空くことがあります。

第十五話

「うん、このくらいかな」

美咲は薬草を十束ほど摘むと、立ち上がった。
薬草は磨り潰して飲ませると本に書いてあったはずだ。
本の内容を思い出し、恭輔を振り返った。

「じゃ、帰ろっか」
「ああ・・・その前に」

恭輔は着ている服の裾を少し破り、美咲の右腕に巻き始めた。
巻いた服の一部は、すぐに赤く染まった。

「いたっ」
「少し我慢しろ」

巻き終えると、出血は少し治まったようだった。

「ありがとう、恭輔」
「何も出来なかったんだし、これぐらい当然だ」

恭輔は悔しそうな表情をしている。
美咲は恭輔を見つめ、きょとんとした顔をしている。

「もしかして・・・私の怪我のこと？」

恭輔は無言で頷いた。
美咲はため息をつくと、恭輔の右手を両手で掴んだ。

「私は平気なんだから、そんなに気にしなくていいよ。
それに、恭輔がいなかったら怪我するだけじゃ済まなかったし・・・ね？」

美咲は恭輔の目を見つめて、笑顔で言った。
美咲に励まされた恭輔は、心のもやが晴れた気がした。

「さてと、早く凛ちゃんに届けてあげよ」
「そうだな」

日が暮れ始め、夕日に照らされながら、二人は山を下りていった。

第十六話

「ただいま」

山を下りた二人は家に帰ってきた。
下りてきた時はまだ明るかったが、日は沈んで辺りは暗くなっている。
美咲が怪我をしていることもあり、時間がかかってしまった。
息子の声を聞き、母は玄関に駆けてきた。

「恭輔！美咲ちゃん！」

母は、ボロボロだが元気そうな二人の姿に喜んだ。
不安な表情から、安堵の表情に変わっていく。

「二人とも無事でよかったわ、早く中に入りなさい」

二人は疲れた体を引きずるように、居間に上がっていった。

☆★☆★☆★

「すごいじゃないか、山の主を倒すなんて」

恭輔の父は何度も頷いている。
自分の息子が山の主を倒したことが嬉しいようだ。

「さっきも言ったけど、倒したのは俺じゃなくて美咲だ」

誇らしげにしている父に恭輔は釘を刺した。

美咲は遠慮がちに首を横に振っている。

「まぁまぁ、いいじゃないの。父さんが喜んでるんだし」

恭輔の母はお茶を運びながら言った。

お盆をテーブルに置いたとき、右腕の袖が赤くなっているのが見えた。

恭輔の母は目を見張り、美咲の右腕を掴んだ。

「美咲ちゃん、怪我してるの？」

「あ、これは大した傷じゃないですから」

腕を掴まれて一瞬痛みが走ったが、美咲は笑顔で答えた。

恭輔の母は、美咲の右腕の布を解いた。

傷口は広く、砂利が入ってしまっている。

「大変！早く消毒しないと」

恭輔の母は、棚から救急箱を出し、消毒液を取りだした。

消毒液が傷口にかけられると、美咲は痛みで小さく声を上げた。

包帯を巻くと、恭輔の母は救急箱の蓋を閉めた。

「ありがとうございます」

「美咲ちゃん、怪我をしていたのか？」

恭輔の父は、心配そうに美咲を見ている。

「はい、でも本当に大した傷じゃないですから」

「その傷は魔法で治せないのか？」

恭輔は、美咲が凛に使った魔法を思い出した。
「それが・・・どうやって使ったか覚えてないの」
美咲は思い出そうと、記憶を辿っていく。
しかし、あの時は無意識だったので思い出すことができなかった。
「あ、そんなことより」
美咲は鞄を開けると、薬草をテーブルの上に出した。
恭輔の父は、目を細めて薬草を見ている。
「それは・・・まさか」
「はい、これを煎じて凛ちゃんに飲ませてあげれば、病気が治ると思います」
恭輔の父は薬草を手に取り、凝視している。
薬草を掴む手が小刻みに震えている。
恭輔の母は、嬉しさで涙目になっていた。
「これで・・・凛の病気が治る」
「はい、すぐには効果が出ないので時間がかかりますけど」
「それでもいい、治るだけでも十分だ。ありがとう、美咲ちゃん」
恭輔の父は目頭を押さえている。
「俺からも礼を言うよ、俺一人だったら薬草を採ることができなかった。ありがとう、美咲」
「そんな、礼だなんて」

皆に礼を言われ、美咲は謙遜してしまった。
無事に薬草を届けたことを実感すると、美咲は軽い眩暈がした。
「美咲ちゃん？大丈夫？」
恭輔の母は美咲を見つめている。
「魔物と戦って疲れたんだろう、休んだほうがいい」
「そうね、じゃあ二階の空き部屋に案内するわ」
「ありがとうございます」
美咲は立ち上がると、恭輔の母に支えられて二階に上がっていった。

第十七話

「う・・ん・・」

美咲は鳥のさえずりで目を覚ました。
昨日は空き部屋に案内されると、すぐに眠ってしまった。
右腕は少し痛むが、昨日よりは調子がいい。
ベッドから起きあがると、階段を下りて居間に向かった。

「あら、美咲ちゃん。おはよう、よく眠れた？」

朝食の準備をしていた恭輔の母が美咲に気付いた。

「おはようございます。はい、お陰さまで」

居間には恭輔の母以外に誰もいないようだ。

「なにか手伝えることありますか？」
「うーん、じゃあ野菜切ってもらおうかしら」
「わかりました」

美咲はエプロンをすると、台所に立った。

☆★☆★☆★

「ん？また手伝ってるのか？」

ランニングを終えて外から帰ってきた恭輔が、台所を見て言った。

「うん、お世話になってるしね」
美咲が皿を食卓に運ぶと、階段を下りてくる音がした。
色白な少女、凛が勢いよく恭輔に飛びついた。
「凛！？」
「凛ちゃん！？」
恭輔と美咲の声が重なった。
凛は満面の笑みで恭輔を見上げている。
「なんかね、今日はすごい調子がいいんだよ！
昨日飲んだ薬が効いてるみたい！」
どうやら美咲が寝ている間に、薬草を煎じて飲ませたようだ。
凛は美咲の方に駆け寄ってくると、抱きついた。
「お姉ちゃんが薬を見つけたんだよね？」
凛は尊敬に似た眼差しで美咲を見上げてくる。
「そうだよ、お兄ちゃんと一緒にね」
美咲は凛の頭を撫でながら、笑顔で答えた。
心なしか、凛の顔色も良く見える。
「じゃあ凛もお料理手伝うね！」
凛はそう言うと台所に走っていった。
美咲はその後ろ姿を見送ると、恭輔を振り返った。

「良かったね、凛ちゃん元気になって」
「ああ・・・美咲」
「え？何？」

恭輔が口を開こうとした時、ドタバタと階段を下りる音がした。
恭輔の父が走って居間に入ってきた。

「凛はどうした！？」

凛の容体が気になり眠れなかったのか、目が充血している。

「凛なら台所で元気に手伝ってるよ」

父の勢いに圧倒されながらも、恭輔は台所を指差した。
父は台所を振り向くと、早足で歩いていった。

「す、すごい娘思いなんだね」
「父親なんてそんなもんだろ。それに、あれはただの親馬鹿だ」

恭輔は呆れたように、父親の後ろ姿を見送った。

第十八話

「本気なのか？」

恭輔の話を聞き、父は信じられないという様子で眉をひそめた。

「ああ、昨日の夜に決めたんだ」

先ほどまで賑やかに食事をしていた食卓は、恭輔の発言で静まり返った。

母は静かに事態の進行を見守っている。

「守るなんて言っておきながら、山で美咲に怪我をさせてしまった。俺は美咲と一緒に旅をしたい、美咲を守りたいんだ」

正面に座る父親の目を見ながら、恭輔は拳に力が入る。

父は息子の真剣な顔を見ると、無言で美咲を見た。

「私は・・・恭輔がいれば心強いです。

でも、危険な目に会うかもしれないですし・・・」

美咲は命を落としかねない旅に、巻き込みたくはなかった。

父は目を閉じて、しばらく考え込むと、恭輔を見た。

「お前が決めたのなら、お前に任せる。でも、必ず生きて帰ってこい」

母は心配そうに恭輔を見つめている。

恭輔は母の目線に気付くと、微笑んだ。

「大丈夫だよ母さん、ちゃんと帰ってくるから」
「恭輔・・・」
「凛も行きたい！」

しびれを切らした凛が口を開いた。

「ダメだ、まだ病気が完治したわけじゃないんだぞ」

恭輔は諭すように、釘を刺した。
凛は頬を膨らませ、いじけているようだ。

「美咲ちゃん、恭輔を頼むわね」

恭輔の母は美咲の手を掴み、微笑んだ。

「母さん、子供じゃないんだから大丈夫だって」

恭輔は子供扱いされているようで、恥ずかしくなった。

「親にすれば子供はいくつになっても子供なのよ」
「だからって・・・」
「ふふっ」
「何がおかしいんだ、美咲？」
「なんでもなーい」

美咲は、親がいる恭輔を羨ましく思った。

第十九話

「気を付けて行くんだぞ」
「わかってるよ、父さん」

旅の準備が整った美咲と恭輔は、玄関の前で見送りを受けた。

「恭輔、いつでも帰ってきなさいよ」
「お姉ちゃんも遊びに来てね」

凛は美咲の手を両手で掴むと、笑顔で見上げてくる。
美咲は微笑んで、凛の身長と同じ高さまで腰を下ろした。

「うん、それまでに元気になってるといいね」

凛は嬉しそうに笑っている。

「恭輔、これ持って行きなさい」

母は恭輔にお金の入った封筒を手渡した。
恭輔は封筒を握りしめると、目を見張った。

「母さん、こんな大金いいのか？」
「さっきお父さんと話し合ったのよ、こんなときこそ使わなきゃって」
「父さん・・・」

恭輔が振り返ると、父は無言で頷いている。
恭輔も頷き返すと、美咲を見た。

「じゃあ、そろそろ行くか」
「うん、そうだね」

恭輔は家族の方を振り返った。

「それじゃ、行ってきます」
「いってらっしゃい」

母は微笑み、父は頷いている。恭輔は振り返って、歩き始めた。
恭輔の後ろ姿に、凛は大きく手を振っている。
美咲は手を振りながら、恭輔の後に付いて行った。

「大丈夫よね、あの二人」
「ああ、美咲ちゃんが付いてる。それに、俺達の息子なんだからな」

両親は優しい笑顔で見送り、凛は二人の姿が見えなくなるまで手を振り続けた。

第二十話

「どこに行けばいいのかな？」

美咲は歩き始めたものの、道がわからなかった。

美咲が首を傾げて見てくるので、恭輔は少し考え込んで、前を見つめた。

「このままっすぐ行けば、小さい村があったはずだ。

とりあえず、そこに行こう」

「村って、どれぐらいで着くの？」

「今からなら昼過ぎには着けると思う」

「じゃあ、急がなくても大丈夫だね」

まだ朝なのですぐに着けそうだった。

美咲達はゆっくり歩き始めた。

☆★☆★☆★

「これは・・・村だね」

最初に着いた街が頭に残っていた美咲は呆然とした。

その村はそこら中に畑が広がっており、いかにも村といった感じだった。

若い人の姿は無く、老人ばかりだった。

「前はもっと人がいたはずなんだけどな」

恭輔は高齢化の進んだ村を見渡した。

すると美咲達に気付いた村人が近づいてきた。
村人は白髪で腰も曲がっており、いかにも老爺といった風貌だった。

「おや、この村に人が来るとは珍しいのう」
「のうって・・・ベタすぎるだろ」
「うん、今どきそんなこという人いないと思ってた」

二人は小声で話しながら、頷いている。
老人は美咲と恭輔の顔を交互に見ている。

「折角来たんじゃから茶でも飲んで行かんかね？」
「いいんですか？」
「うむ、久しぶりのお客さんじゃからな」

老人は髭を触りながら、笑っている。

「時間あるし、いいよね？」
「まぁ、いいけど・・・」

美咲達は老人に案内されて、村の中に入っていった。

☆★☆★☆★

「ほー、二人旅なんて若いのにすごいのう。
わしも若い頃はすごかったんじゃぞ」

家に案内された美咲達は老人の話をずっと聞かされていた。
正確には老人達、といった方が正しいだろう。
客人が来たという噂を聞きつけた村人たちが、家に押し掛けてい

た。

「美咲、もう夜だぞ」

「そんなこと言ったって・・・」

どれぐらいの時間が経っただろうか。

日が暮れてしまったが、老人達の話は途切れることなく続いている。

話を聞いている間に、夕食までご馳走になってしまった。

「おお、そうじゃ！もう遅いから二人とも泊まっていきなさい」

「誰のせいでこうなったと・・・」

恭輔は睨むように老人を見ている。

「恭輔、善意で言ってくれてるんだから泊まろ、ね？」

「今から出発しても遅いし・・・仕方ないか」

恭輔は諦めたようにため息をついた。

「おお、では早速部屋に案内しようかの」

老人は立ち上がり、美咲達を手招きした。

二人は立ち上がると、老人に付いていった。

第二十話（後書き）

ＧＷは忙しいので、書けるときに書いていきたいと思います

第二十一話

「この部屋を自由に使ってくれて構わんからの」

美咲達は老人に部屋まで案内された。

そこは和風といった感じの部屋だった。

ドアは襖になっており、壁には山の絵が飾ってある。

「え、この部屋だけですか？」

美咲は催促をしているようで気がひけたが、聞かずにはいられなかった。

赤の他人ではないが、家族でもない男女が二人きりで一緒の部屋というのは良くないと思ったからだ。

「悪いね～、宿屋ではないから空き部屋はひとつしかないんじゃよ」

老人は何が嬉しいのか笑顔で答えた。

すると老人は思い出したように、部屋の端を指差した。

美咲達が振り返ると、そこには屏風らしきものが置いてあった。

「それで部屋を分けるといいぞ。布団は二人分あるからのう」

老人は部屋の中の押入れを開けた。

そこには布団や座布団が入っていた。

「布団は自分達でやっとくれ、それじゃ・・・ごゆっくり」

老人は笑顔で戻っていった。

恭輔は老人がいなくなったことを確認し、大きくため息をついた。
「街から全然進んでないな」
「うん・・・まぁ仕方ないよ、夕食までご馳走になっちゃったし。泊まってくれって言われて断れないもん」
「確かにな・・・」

恭輔は押入れの布団をひき始めた。
「明日に備えて今日は早めに寝よう」
「うん、そうだね」

美咲は恭輔のひいた布団の横に屏風を置いた。
恭輔は不思議そうに首をかしげている。

「そんなに嫌なのか？」
「恭輔が嫌ってわけじゃなくて、寝顔を見られたくないの」
「なんでだ？」
「恥ずかしいから」

恭輔は美咲の気持ちが理解できなかった。

「そんなもんなのか？」
「そんなもんなの」

美咲は自分の布団をひいている。
恭輔は布団の上に座ると、剣を抜き布で拭きはじめた。

「いつも拭いてるの？」
「まぁな、毎日やるようにって剣の師匠に教わったんだ。

師匠っていっても親戚の伯父さんなんだけどな」
「じゃあ、その剣も伯父さんにもらったの？」
「ああ、毎日磨けば剣に愛着がわくからやってみろってな」
「そうなんだ」

美咲は話を聞き疲れたのか、眠くなってきた。

「じゃあ、私先に寝るね」
「ああ、おやすみ」

美咲は布団に入るとすぐに眠った。

「俺も寝るか・・・」

恭輔は明かりを消し、布団に入った。

第二十二話

「よし、寝ているな」

美咲達が眠りについた頃、照らされた影が障子に映った。
その影は刃物を持った老人達で、部屋の様子を窺っている。

「こいつらは危険な気がする、早くやってしまおう」

一人の老人が暗闇の中、恭輔に包丁を振りおろした。
しかし、包丁の軌道は金属音と共に逸らされた。
その光景を見た別の老人が、急いで明かりをつけた。
すると、気配に気付いた恭輔が剣を抜いていた。

「おい、これはどういうことだ？」
「なんだ、起きてしまったか」

笑みを浮かべた老人の姿が、溶けるように変化していく。

「お前ら、スライムだったのか！」

本来の姿に戻ったスライムは、恭輔に向かって触手を伸ばした。
恭輔は触手を剣で払い、すかさず本体を真っ二つにした。

「美咲！起きろ！」
「う～ん」

大声で名前を呼ばれ、美咲は上体を起こした。
目の前には刃物を持った老人が、大勢でこちらを見ている。

「わっ、なに？どうしたの？」
美咲が慌てているのを確認すると、老人は農作業用の鎌を振り上げた。
恭輔は背後から、老人の体を斬りつけた。
「恭介！なんで・・・」
美咲が言い切る前に、老人は本来の姿に戻り、消えていった。
「今の・・・魔物？」
「ああ、こいつらは全部スライムだ。自分が触れたものに姿を変えることができる」
そう言いながら恭輔はスライムを倒していく。
美咲も杖を出し、魔法を唱える。
しかし、スライムの触手によって、詠唱は中断された。
「なにこれ・・・力が抜け・・・る」
「美咲！」
スライムを蹴散らしながら、恭輔が駆け寄ってくる。
「こいつらの触手は生気を吸い取る。お前も魔法じゃなくて、物理で戦ったほうがいい」
魔法を使うには集中力が必要なため、敵の数が多いときには使うことができない。
恭輔は美咲を戦わせたくなかったが、触手を伸ばしてくるため、

庇いながら戦うのは無理だと判断した。

「くそ、数が多すぎる」

いくら倒しても減らない魔物に、恭輔は疲れが出てきてしまった。
美咲は敵の攻撃を杖で払ってはいるが、倒すことまではできない。
二人の周囲を魔物が囲んでいく。

「こんなところでやられてたまるか！」

恭輔は剣を振り回し、魔物をなぎ払っていく。
しかし、恭輔の攻撃を避けたスライムが一斉に美咲に触手を伸ばした。

「きゃあ！」
「美咲！」

無数の触手に阻まれて、恭輔の声は美咲に届かなかった。

第二十三話

「あれ？なんともない」

目を瞑って、身を固めていた美咲は目を開けた。
美咲に向かって伸ばされた無数の触手は目の前で止まっていた。
スライムの背中には矢が刺さっており、全て体の中心に刺さっているようだ。
動きが止まったスライム達が消えていく。

「これって・・・弓矢？」

建物の外を見ると、離れた家の屋根に人影らしきものが見えた。
距離にすると５００メートルはあるだろう。

「あんなところから・・・誰だろう？」

放たれた矢はスライムの体の中心に、正確に刺さっていく。
恭輔と比較すると倍以上の早さで倒している。

「すごい・・・どんどん減ってく」

気が付けば、部屋を埋め尽くすほど大量にいたスライムは全てい
なくなっていた。
美咲が外を見ると、既に人影は無かった。

「誰だったんだ？」

恭輔は剣を収めると、美咲の方を振り返った。

美咲は恭輔を見て、首を横に振った。
「わかんない、暗かったし」
美咲はそう言うと、部屋を見渡した。
すると柱に刺さっている矢に、紙が結んであった。
「これって、矢文かな？」
屋根の上の人物が書いたのだろうか。
美咲は矢文を開き、恭輔は後ろから矢文を覗き込んだ。
そこにはこう書いてあった。

～マイハニーへ～
これで貸し一だね？
ハニーの愛するレイブンより

「・・・誰だ？」
「さぁ・・・知らない人だけど」
人の名前と顔を忘れない自信はあるが、初めて聞いた名前だった。
というより自分のことをハニーと呼ぶ人を忘れるはずが無い。
美咲は背中に少し寒気を感じた。
「まぁ助けてくれたんだし・・・きっと良い人だよ、うん」
「ただの変態じゃないのか？」
恭輔は、そんな人物に助けられた自分に嫌気がさした。
矢文を見ていた美咲は、思い出したように顔を上げた。

「村の人たちはどうなったの？」
「スライムは人の命を奪うことは滅多にしない。どこかで生きているかもしれないな」

スライムは生気を吸って生きているので、人の命を奪っては生きていけない。
知能は低いが、自分の寿命を縮めるような真似はしないだろう。
恭輔の返事を聞くと、美咲はすぐに部屋を飛び出した。

「おい、どこに行くんだ？」
「決まってるでしょ、村の人達を探すの」
「お人好しだな・・・美咲は」

まだ魔物が隠れているかもしれない。
美咲を一人で行かせるわけにはいかないので、恭輔は仕方なく後に付いていった。

第二十四話

「誰かいませんかー？」

部屋を出た美咲達は、村の中を歩き回っていた。
村を全部見たが、人の姿を見ることはできなかった。

「スライムに襲われた時に、この村から出て言ったのかもしれないな」
「そうかもね・・・さっき助けてくれた人もいないみたいだし」

美咲は折り畳んでおいた矢文を開いた。
そこに書かれているレイブンという名前に思考を巡らせる。
しかし、その名前はやはり記憶に無かった。

「う～ん、誰なんだろう？」
「そんな変態、気にすることないだろ」
「でも助けてもらったんだから、お礼ぐらい言いたいし」

美咲が手紙を折り畳み、鞄に入れようとした。
すると隣の建物から物音がした。

「今の・・・聞こえた？」

美咲は建物を見つめながら、恭輔に聞いた。
恭輔は頷くと、建物に近づいた。
それは動物小屋のようなつくりで、人が住んでいる気配はなかった。

「何かいるかもしれない、俺が先に開ける」
「うん、わかった」

恭輔が扉に手を掛け、勢いよく開けた。
中には牧草が敷き詰めてあり、特に変わった所はなかった。

「音はしたんだけど・・・なにもないみたいだね」
「いや、奥に何かいるぞ」

恭輔に小屋の隅を指差され、美咲は目を凝らした。
暗くてわかりにくいが、確かに何かの影が見えた。

「あれは・・・ゴブリンか？」

それは膝を抱えて座り、怯えているゴブリンだった。
座っているせいなのか、とても小さく見える。
恭輔はゴブリンに近づくと、上から見下ろした。

「こいつは・・・子供のゴブリンだな。なんでこんなところにいるんだ？」

美咲はゴブリンに近づくと、しゃがみ込んだ。
ゴブリンは何をされるのかと俯いて震えている。

「怖がらなくていいよ、何もしないからね」

直後、美咲の背後で金属が擦れる音がした。
振り返ると、恭輔が剣を抜き、構えていた。

「何してるの？」

「何って・・・決まってるだろ、こいつを斬る」
美咲は目を見開き、立ち上がった。
「まだ子供なんだよ！？」
「そんなの関係ない、こいつは魔物だぞ？」
「ダメ！そんなこと許さない！」
美咲は両手を広げて、恭輔の前に立った。
恭輔は呆れて、ため息をついた。
「正気か？」
「当たり前でしょ！」
「当たり前って・・・」
自分のやっていることがわかっているのだろうか。
恭輔はそう思いながら、剣を鞘に戻した。
斬ろうと思っていたが、やる気を削がれてしまったためだ。
「・・・好きにしろ」
「ありがとう、恭輔」
美咲はゴブリンに振り返り、再びしゃがみ込んだ。
「どうしてこんなところにいるの？」
美咲は笑顔で質問した。
ゴブリンは敵意がないのに気付くと、顔を上げた。
「僕・・・スライムが怖くて隠れてたんだ」

恭輔はゴブリンの言葉に眉をひそめた。
子供とはいえ、ずる賢いゴブリンがスライムを恐れるのだろうか。
美咲は微笑んで、ゴブリンの頭を撫でた。

「そっか・・・それは怖かったね」
「お姉ちゃん達がスライムを倒してくれたの？」
「そうだよ、あのお兄ちゃんがほとんど倒してくれたんだけどね」

ゴブリンは恭輔を警戒しているのか、恐る恐る恭輔を見た。
腕を組んで見下ろしている恭輔に怯え、すぐに美咲を振り返った。

「そうだ、お姉ちゃん達ね、村の人を探してるんだけど何か知らないかな？」

ゴブリンは小屋の中央を指差した。

「牧草の下に部屋があって、そこに皆いるよ」

恭輔は指を差された場所にいき、牧草をどけた。
地面の色が一部変わっており、そこには取っ手が付いていた。
恭輔は取っ手を掴み上に引き上げた。
すると、そこには人が一人通れる程の穴が空いており、下りるための階段が続いていた。

「なるほど、こうなっていたのか」

美咲は恭輔の隣にしゃがみ、地下を覗き込んだ。
かなり深いのか、底が見えない。

「わー、どこまで続いてるんだろう」

美咲は立ち上がり、ゴブリンに近寄り微笑んだ。

「ありがとう、もうお家に帰ってもいいよ」

「え？逃がしてくれるの？」

「逃がすも何も、話を聞きたかっただけだからね」

「人間は僕を見るとすぐに攻撃してくるのに・・・」

ゴブリンは小屋の入口に走り、振り返った。

「ありがとう、お姉ちゃん」

「あ、最後にお名前教えてくれないかな」

「僕はマイクだよ」

「じゃあね、マイク」

ゴブリンのマイクは手を振りながら、走っていった。

美咲はマイクの姿が見えなくなるまで手を振り続けた。

「じゃあ入ろうか」

「ああ」

恭輔が地下に入ると、美咲は後に付いていった。

第二十五話

「うー、なにも見えない・・・」

美咲達が地下に入り、どれぐらい時間が経っただろうか。
地下で明かりが全く入らない上に、深夜なので不気味さも増していた。

「恭輔進むの早いよ～」
「早く出たいんだろ？」
「そうだけど・・・」

話していると、奥の方がぼんやりと光っているのが見えた。

「あれって明かりかな？」
「みたいだな」

階段を下りきると広い空間に出た。
中央には巨大なタイマツが置いてあり、その周りを人が囲んでいるようだった。
美咲達に気付いた老人が目を細めた。

「あんたらは・・・魔物じゃないな？」
「スライムなら俺達が倒した」

恭輔の言葉に、タイマツの周りで俯いていた人々がざわついた。
老人はおぼつかない足取りで、美咲達に近づいてきた。

「本当か？本当に倒してくれたのか？」

老人は恭輔の腕を掴み、震えている。
美咲は老人の肩に手を置いて、微笑んだ。
「もう大丈夫ですよ、安心してください」
美咲がそう言うと、周りの人々は歓声を上げた。
喜びのあまり、階段を駆け上がって地上に出る者もいた。
老人は涙目になり、目を伏せた。
「そうか、よかった・・・」
「長老ー、早くー」
上の方から村人が呼んでいるようだ。
美咲は長老の手を握った。
「じゃあ、行きましょうか」
「うむ」
美咲が長老の手を引き、地上へと上がっていった。
☆★☆★☆★
「あれ、明るくなってる？」
階段を上がり、小屋を出た美咲は空を見上げた。
地下に入っている間に夜が明けたようで、朝日が昇っていた。
村の子供達は外に出れた喜びで、走り回っている。
「これもあんたらのお陰だ、ありがとう」

長老は村人達の様子を見ながら言った。

「いえ、お礼なんて」

「そうだ、魔物がいなくなったんだから宴を開かないとな。あんたらも参加してくれ」

好意で誘ってくれるのはありがたいが、美咲達は十分な睡眠も取れていない。

その上、戦闘もあったので、相当疲れがたまっていた。

「いえ、お気持ちはありがたいんですが・・・少し休みたいので」

「そうか、残念だが無理にという訳にはいかんしな。なら私の家を使いなさい」

長老が指差したのは、美咲達が泊まった家だった。

「あの家って・・・長老さんの家だったんだ」

「らしいな」

長老に手招きされ、美咲達は家に入っていった。

第二十六話

「う・・・ん」

美咲は子供のはしゃぎ声で目を覚ました。

「そっか、すぐ寝ちゃったんだ」

家に案内された美咲達は部屋に入るとすぐに眠りについた。
まだ外は明るく、昼を過ぎたぐらいだろうか。
隣を見ると、恭輔の姿はなかった。

「恭輔？どこいったんだろう？」

美咲は起きあがり、部屋を出た。
すると、食卓から聞き覚えのある声がした。

「あれ？ここにいたんだ」

美咲は椅子に座り、食事を摂っている恭輔を見つけた。
美咲の声を聞き、恭輔は振り返った。

「今起きたのか？」
「うん、恭輔は早いんだね」
「いや、俺も起きたばかりなんだ」

美咲が椅子に座ると、長老が料理を運んできた。

「昨日の宴の余りだが、よかったら食べてくれ」

「はい、いただきます」
「おお、そうだ」
長老はそう言いながら椅子に座った。
「村の連中が礼を言いたいらしくてな、このあと村を回ってくれるか？」
「はい、わかりました」
美咲は手を合わせると、食事を始めた。
☆★☆★☆★
「やっぱり若い人もいるんだね」
食事を終えた美咲達は、村の中を歩いていた。
子供達が楽しそうに走り回っている。
「ああ、数は少ないけどな」
美咲達に気付いた子供が、声を上げた。
「あ！救世主のお姉ちゃんとお兄ちゃんだ！」
「きゅ、救世主？」
「うん！爺ちゃんがそう言ってたよ！」
子供の声を聞き、村の老人達が集まってきた。
「おお、救世主様だ！」
『救世主様ー！』

老人達が一斉に声を上げる。
美咲は困惑して恭輔を見るが、恭輔は笑みを浮かべている。

「怪しい宗教みたいだな」
「そうじゃなくて・・・」
「救世主様」

美咲が困っていると、老婆が声をかけてきた。

「うちで梅干しでも食べてないかい？」
「梅干し・・・ですか？」
「なんだ急に・・・この婆さん、ボケてるのか？」

美咲は村人に見えないように、恭輔の手の甲をつねった。
恭輔は小さくうめき声を上げた。

「はい、いただきます」

美咲は笑顔で返事をした。

「そうかい、じゃあ家に来なさい」

美咲達は老婆に案内されて、家に向かおうした。
すると背後から大きな声がした。

「おい！大丈夫か！」

声は村の入口の方からのようだ。
美咲は振り返り、走り出した。

「美咲！」

恭輔は、突然走り出した美咲の後を追った。

第二十七話

「おい！しっかりしろ！」

美咲が現場に着くと、そこには大量の野次馬が集まっていた。
人混みで、どういう状態なのかわからない。

「すみません！通して下さい！」
「おお、救世主様だ」

野次馬は美咲を見ると、道を開けた。
人混みがなくなると、そこには傷だらけの中年男性が横たわっていた。
美咲は男に駆け寄り、傍らに座り込んだ。

「何があったんですか？」
「わからない、こいつは隣町の商人なんだが」

最初に男を発見した村人は、首を横に振った。
傷だらけの男は、絞り出すように声を出した。

「ま、魔物が・・・」
「魔物だって？」

周りを囲んでいる村人達は、ざわついた。
苦しそうにしている男を見て、美咲は手をかざした。
すると、男の傷はどんどん治っていく。

「な、何だ今のは？」

隣で見ていた村人は、目を見張った。
さきほどまで傷だらけだった男は、傷一つなくなった。
「しばらくは安静にして頂ければ、すぐに動けるようになりますよ」
美咲は笑顔で村人を振り返った。
「あ、ああ・・・とりあえずこいつを運ぼう」
村人は二人がかりで、男を家の方に運んでいった。
それとすれ違いに、騒ぎを聞きつけた長老がゆっくりと歩いてきた。
「怪我人がいると聞いたんだが？」
「あっ、えーっと」
美咲は人前で魔法を使うな、と言われたことをすっかり忘れていた。
野次馬の一人が、興奮している様子で言った。
「なんかわかんねぇけど、救世主様の手がピカーって光ったんだ。したらスワーって治ったんだ」
長老は目を細めて、美咲を振り返った。
「もしや、魔法・・・」
「あの！私達隣町に行こうと思うんですけど」
美咲は長老の言葉を遮るように言った。

村人達が驚いた表情をしている。

「救世主様！もう行っちまうのか？」

「はい。魔物に襲われたらしいので、助けに行かないと」

「それなら、うちの馬車を使ってくれ」

野次馬の中年男性が、手を上げている。

「町に行くには森を越えなきゃいけないんだが、結構距離があるんだ」

「いいんですか？」

「村の救世主様に恩返ししなきゃならないしな。でも森は魔物が出るから、その前までしか送れないけど・・・いいかい？」

「はい、ありがとうございます」

「よし、じゃあ付いてきてくれ！」

中年男性は馬小屋の方に向かった。

男性に付いていこうとした美咲は、視線を感じて振り返った。

恭輔が呆れたように美咲を見つめている。

「また人助けか」

「あ、ごめんね・・・勝手に決めちゃって」

「いいよ、もう慣れたから」

恭輔は微笑むと、男性の後を追って歩いていった。

『救世主様！』

『お気を付けて！』

村人達の声援を受けて、美咲は手を振りながら歩き出した。

祝！1万アクセス突破！

タイトルの通りです。

ついに1万アクセスを突破いたしました！

手探りでやってきましたが、読者の皆様のお陰で、ここまでくることができました。

言い訳にしかなりませんが、頭の中には構想があっても、時間が無くて書けません・・・

登場人物のプロフィールや、もし美咲達が異世界ではなく学園生活を送っていたら・・・

などもかんがえております。

なので読者の皆様には温かく見守っていただきたいと思っております。

これからも「平和な世界」をよろしくお願いします。

第二十八話

「色々とお世話になりました」

馬車に乗り込んだ美咲は、見送りに来ている長老達に頭を下げた。

「礼を言うのはこっちの方だ、村を助けてもらったお礼もしとらんし」

「いえ、お礼なんていいですよ」

「・・・あんたならそう言うと思ったよ。せめてこれを持っていってくれないかい？」

長老は風呂敷を美咲に手渡した。

中には水や食料が入っているようだ。

「これも昨日の余りで悪いんだが・・・」

「いえ、ありがたく頂きます」

「じゃあ出発していいかい？」

馬車を運転する男性は振り返って聞いた。

「はい、お願いします」

美咲は身を乗り出して答えた。

男性は頷くと、前を向いて手綱を引いた。

すると、馬車はゆっくりと動き始めた。

「長老さん、ありがとうございました」

「気を付けるんだぞ、魔法使いのお嬢さん」

「え？」

長老はそれ以上は何も言わずに、ゆっくりと手を振り続けている。
その後ろで大勢の村人が、手を振り見送っている。

「気付いてたんだね」
「みたいだな」

恭輔は馬車から顔だけを出して、後ろを見ている。
遠ざかっていく村人達に、美咲は手を振り続けた。

☆★☆★☆★

「そういえばさぁ」

村を出てしばらく進んだ所で、美咲は風呂敷を持ち上げて口を開いた。

「昨日の余り物って言ってたよね」
「ああ」
「長老さんの家で食べさせてもらったのも昨日の余り物だったよね」
「そうだな」

美咲はうつむきしばらく考え込むと、恭輔を見つめた。

「もしかして・・・村の人達を助けてから一日経ってる？」
「・・・今さら気付いたのか？」

恭輔は驚き、美咲を見た。

「あれ？知ってたの？」
「俺達が寝たのは朝方で、起きたのは昼だ。
ほとんど寝ていない俺達がそんなに早く起きれるわけないだろ」
「そっかぁ・・・なんか申し訳ないね」

美咲は残念そうに、うつむいた。
恭輔は前を向くと、ため息をついた。

「宴に参加できなかったからか？」
「うん、私達のために開いてくれたのに」
「仕方ないだろ、それに村の人達はそんなに気にしてないと思うけどな」

美咲が落ち込んで見えたのだろうか。
恭輔は美咲を励ましているようだった。

「そうだね・・・今は町の心配をしなきゃダメだよね」
「魔物に襲われたって言ってたな」

恭輔はその町に一度だけ行ったことがあった。
そこは自衛団があり、屈強な男達が町を守っていたはずだ。
よっぽど強力な魔物でない限り、やられることはない。

「嫌な予感がするな・・・」

恭輔は言葉を濁した。
美咲はうまく聞き取れず、恭輔を見つめる。

「え？なに？」
「いや、なんでもない」

余計な心配をさせてはいけない。
恭輔は黙り込むと、外に視線を移した。

第二十九話

「よし、着いたぞ」

馬車を運転する男性の声を聞き、美咲は顔を出した。
目の前には森が広がっていた。

「俺が送れるのはここまでだ、悪いね」
「いえ、ありがとうございました」

礼を言い終えると、美咲と恭輔は馬車から降りた。
馬車はゆっくりと方向を変えると、来た道を戻っていった。

「わー、大きいねぇ」

美咲は目の前の木を見上げた。
自分の何倍もある木が数え切れないほど並んでいる。

「じゃ、入ろっか」
「ああ」

美咲達は森に足を踏み入れた。
足元には木のツルが伸びていて、非常に歩きにくくなっている。

「なんかジャングルみたいだね」
「そうだな、歩けるか？」
「大丈夫、ありがとう」

折れた木やツルを跨ぎながら進んでいく。

進めば進むほど、辺りから動物の鳴き声が聞こえてくる。
「今のって・・・」
「大丈夫だ、ここにいるのは鳥ばっかりだからな」
心配ないと、恭輔は首を横に振る。
美咲は周りの様子を窺いながら、恭輔の後についていく。
しばらく進んだところで、周囲の空気が変わってきた。
「あっつーい・・・」
「それだけ進んだってことだな」
湿気が多く、体に纏わりつくような嫌な暑さだ。
しかし、恭輔は顔色一つ変えず歩いている。
「恭輔は暑くないの？」
「ああ。それに、町はこんなもんじゃないぞ」
「え？」
「町がある場所は砂漠だからな」
恭輔は振り返り、笑みを浮かべた。
美咲達は砂漠に向かって歩いていたのだ。
美咲は急に足取りが重くなってしまった。
☆★☆★☆★
「わー、すごい！」
美咲達が森を抜けると、そこには砂漠が広がっていた。
見渡す限り砂という光景に、美咲は感動を覚えた。

「すごいけど・・・暑いね」
「ああ、そうだな・・・」

恭輔は俯いて考え込んでいる。
以前この道を通った時は、何度も魔物と遭遇した。
しかし、今回は一度も会うことはなかった。

「なぜだ？」
「恭輔、大丈夫？暑いの？」

美咲が顔を覗き込んでくる。
恭輔の体調を心配しているようだ。

「大丈夫だ、先に進もう」

二人は限りなく続く砂漠を歩きはじめた。

第三十話

「あっつー・・・」

美咲は額の汗を拭った。

砂漠では皮膚の水分が蒸発してしまうので、上着を脱ぐことができない。

したがって、暑さに耐えるしかないのだ。

「少し休むか？」

恭輔は岩場の影を指差した。

美咲のペースが少し遅くなってきたからだ。

「大丈夫、さっき水飲んだから」

「飲み過ぎるなよ、水は限られてるんだからな」

美咲は答える元気もなく、手を振っている。

恭輔はため息をつくと、距離が開いてしまった美咲に歩み寄った。

「本当に大丈夫か？」

「大丈夫・・・ってあれ？」

美咲は遠くを見つめ、目を凝らした。

すると、うっすらと人のようなものが見えた。

姿を確認すると、美咲はそれに駆け寄った。

「おい！美咲！」

先程まで弱っていたとは思えないほど、美咲は急に走り出した。
恭輔も後を追って走る。

「大丈夫ですか？」
「み、水・・・」
「水ですね！」

美咲は鞄から水を取り出すと、倒れていた男性に飲ませた。
男性は水だとわかると、起き上がって勢いよく飲み干した。

「ありがとう、助かったよ」

男は口を拭うと、元気無く微笑んだ。
年齢的には美咲達と変わらないが、頬は痩せこけている。
手足も骨と皮だけで、異常なほど細くなってしまっている。

「美咲！お前、水が・・・」

恭輔は男が持っている水筒を指差した。
男は持っている水筒を見ると、美咲を振り返った。

「ご、ごめん・・・全部飲んじゃった」
「いえ、気にしないで下さい。水ならたくさんありますから」

美咲は男に笑顔を向けた。
しかし、水は村でもらった二つしかない。
もう一つは、ついさっき恭輔が全て飲んでしまったのだ。
美咲は自分の分を全てあげたので、水はもう無い。

「もしかして、あなたは町の方ですか？」

「うん、魔物が襲ってきたから逃げてきたんだ」
男は恐怖で体が震えている。
美咲は男の手を両手で優しく掴んだ。
「大丈夫です、私達が町を助けますから」
「君達が？」
男は不安そうに二人を見ている。
自分と年が近い二人組に、任せられるのか心配なのだろう。
「恭輔、この人どうする？」
魔物と戦うのに、弱っている男性を連れていくことはできない。
だからといって、ここに一人で置いていくのも危険だ。
「そうだな・・・」
「あの、俺も連れて行ってくれないかな？」
「え、でも・・・」
「本人が言ってるんだから連れて行くしかないだろ」
恭輔は男の隣にしゃがみ込んだ。
「歩けるか？」
「うん」
男は自力で立ち上がり、恭輔達を見た。
「よし、じゃあ行くぞ」
「辛くなったら言ってくださいね」

美咲は男を振り向くと、微笑んだ。
男は無言で頷くと、歩きはじめた。
「自分だって辛いくせに・・・」
恭輔は二人に聞こえないほど、小さく呟いた。

第三十一話

「ひどい・・・」

美咲は町の現状を見て、愕然とした。
家は壊され、そこら中で火の手が上がっている。
男はゆっくりと辺りを見渡しながら、町の中に入っていく。
ショックで言葉を失っているようだ。

「とりあえず、生きている人を探そう」

恭輔は男の肩に手を置いた。
男は恭輔の手を振り払い、駆け出した。

「母さん！母さーん！」
「おい！まだ魔物がいるかもしれないんだぞ！」

恭輔の制止を無視して、男は町の奥に進んでいく。

「恭輔、追わないと！」
「ああ！」

美咲と恭輔は、あとを追って走り出した。
家を五軒ほど越えたところで、男は立ち止まった。
そこには家があったようだが、跡形もなく燃えてしまっている。

「母・・さん」

男は膝をついて、うな垂れた。

どうやら、男が住んでいた家のようだ。
美咲が近づこうとした時、恭輔が肩を掴んだ。
「今はそっとしておこう」
「でも・・・」
「それよりも生きている人を捜すんだ」
恭輔は火の手が少ない、町の奥に歩いていく。
美咲は男の方を見ながら、恭輔に付いていった。

☆★☆★☆★

「早く教えろ！」

町の一番奥にある大きな家から、怒声が聞こえた。
おそらく魔物が町人を脅しているのだろう。

「今のって・・・」
「ああ、入るぞ」

恭輔は剣を抜くと、家に入っていった。
美咲も後に付いて、警戒しながら家に入っていく。
中には眼鏡をかけた老人が、三匹のゴブリンに囲まれている。

「あんたらは・・・？」

老人は美咲達に気付くと、声を上げた。
すると、ゴブリンが一斉に振り返る。

「ん～？なんだお前ら？」

「まだ生き残りがいたのか」
「ケケッ、やっちまおうぜ」
三匹が順番に口を開いた。
恭輔は剣を構え、手で美咲に下がるように指示した。
「恭輔」
「大丈夫だ。こいつらには聞きたいことがあるから、命までは取らない」
美咲が言うことを察した恭輔は先に言った。
一匹のゴブリンが手斧を持って近づいてくる。
「ケケケ、喋ってていいのか？」
そう言うと、ゴブリンは斧を振り上げて、恭輔に襲いかかった。
恭輔は左足を後ろに下げ、剣を左下に構えた。
ゴブリンが斧を振り下ろすと、それに向かって剣を振り上げる。
激しい金属音が鳴り響き、手斧は粉々に砕けた。
「ケ？そんなばかな・・・」
恭輔はゴブリンの首に剣先を付きつけた。
ゴブリンは床に座り込んでしまった。
「こいつ、強い・・・」
「お前らは魔王軍か？」
恭輔は見下ろしながら質問を投げかけた。
その言葉に美咲が反応する。

ゴブリンは怯えているのか、白状したように話し始めた。

「ああ、そうさ。魔王様は遺跡を狙っているんだ」

「なぜだ？」

「おそらく宝目当てだろう」

老人が立ち上がりながら、口を開いた。

美咲は老人に駆け寄ると、体を支えた。

「ありがとう、お嬢さん」

「あの、あなたは？」

「私は遺跡の研究などをしているんだが、町の者は私のことを博士と呼んでいる」

恭輔はゴブリンに剣を突き付けたまま、博士を見た。

その顔はどこかで見たことがあった。

「まさか・・・アルト博士？」

恭輔は思い出した名前を呟いた。

第三十一話（後書き）

眠くて中途半端になってしまいました

第三十二話

「おや、私のことを知っているとは」

アルトは眼鏡を上げながら、恭輔を見た。
美咲は二人を交互に見ている。

「恭輔、知り合いなの？」
「いや、前に本で見ただけさ。色々な研究をしていて、すごい有名な人なんだ」
「それほどじゃないさ」

アルトは謙遜して首を振っている。

「もういいだろ、剣を避けてくれよ」

放っておかれたゴブリンは声を上げた。
恭輔はゴブリンに向き直った。

「まだ聞きたいことがある、他の奴らは？」
「他ってなんだよ？」
「とぼけるな、お前らだけで町を襲えるわけがない」

剣先でゴブリンの顔を無理やり上げさせた。
ゴブリンは焦って口を開いた。

「遺跡だよ、遺跡に行ったんだ！」
「なぜ町を襲ったんだ？」
「この爺さんに遺跡の秘密を聞くためさ」

ゴブリンはアルトを指差した。
美咲は眉をひそめて、ゴブリンに近付いた。
「それだけのために町の人の命を奪ったの！？」
「ああ、爺さんを出せって言ったら攻撃してきたからな」
「だからって」
「人間なんていくらヤってもいいんだよ」
ゴブリンはケタケタと笑っている。
すると、恭輔はゴブリンの腕を軽く斬った。
ゴブリンは痛みで叫び声を上げた。
「お前、自分の置かれてる立場が分かってるのか？」
「恭輔！」
美咲は恭輔の腕を掴み、首を横に振った。
恭輔はため息をついて、剣を収めた。
「ほら、さっさと行け。目障りだ」
恭輔は目の前にいるゴブリンを蹴飛ばした。
残りのゴブリン二匹が蹴られたゴブリンに肩を貸す。
「お、覚えてろよ！」
「俺達ゴブリン三人衆を敵に回したことを後悔するぞ！」
「そうだそうだ！」
恭輔はゴブリン達を睨みつけた。
ゴブリン達は一目散に逃げて行った。

「あんたらのお陰で助かったよ」
「いえ、怪我はないですか？」
美咲は心配そうにアルトを見つめた。
アルトは優しく微笑んだ。
「大丈夫、それより町の皆は？」
「一人は助けることができたんですが・・・」
美咲はそれだけ言うと、俯いた。
その様子を見て、アルトは町の状態を察した。
「そうか・・・」
「はい、私達がもう少し早く来ることができれば・・・」
「いや、来てくれただけでも十分だよ」
「博士」
恭輔は家に魔物がいないことを確認すると、アルトを振り返った。
「遺跡の宝というのは？」
「古代兵器だよ、今は失われた技術でつくられたらしいけどね」
アルトは複雑な表情を浮かべている。
美咲は不安そうに口を開いた。
「それは危険な物なんですか？」
「うむ、国一つは簡単に滅ぼせると言われている」
「じゃあ急がないと！」
「待ちなさい」

アルトは家を飛び出そうとした美咲を呼び止めた。
すると、近くのテーブルに置いてある紙に何かを書き始めた。

「これを持って行きなさい」

アルトはその紙を美咲に向けた。
美咲はアルトに近寄り、それを受け取った。

「それに遺跡の謎を書いた、それで兵器を破壊してくれ」
「そんなことしたら」
「いいんだよ。魔王の手に渡るぐらいなら壊した方がいい」

アルトは悔しそうな表情をしている。
研究者として、先人の遺産は残しておきたいからだ。

「わかりました」
「二人だけでは心配だが、君達にしか頼めないんだ」

アルトは美咲と恭輔の手を強く握った。
美咲は力強く頷いた。
アルトは手を離すと、二人を見つめた。

「遺跡は町を出て、北の方だよ」
「わかりました、行ってきます」
「気を付けるんだよ」

美咲は頷くと、恭輔と共に家を出た。

「よし、じゃあ行こっか」

「ああ」

美咲達は町を出ると、遺跡に向かった。

第三十三話

「これが・・・遺跡？」

美咲達の目の前には、石で組まれた建物が建っている。
ほとんどが崩れてしまっていて、原型がわからなくなっていた。

「奥に入口があるみたいだな」
「じゃあ早く入ろ」

恭輔は奥に進もうとした美咲の腕を掴んだ。
美咲は訳も分からないまま、恭輔に岩の陰に引っ張られた。

「恭輔！痛い！」
「しっ、あれを見ろ」

恭輔は遺跡の入口を指差した。
そこには、鎧で身を固めた屈強な二匹のゴブリンが立っている。

「見張り・・・だね」
「あれはホブゴブリンだな、少し手強いかもしれない」
「二匹もいるしね」

美咲は顎に手を当てて、考え込んだ。
何か思いついたように、恭輔に耳打ちをした。

「よし、それでいこう」

美咲は頷くと、指輪を杖に変えた。

恭輔は近くに落ちていた小石を拾い、遠くに投げた。
小石は岩にぶつかり、音を立てた。
見張りのゴブリンは、音のした方向を振り向いた。

「おい」
「ああ、俺が見てくる」

一匹のゴブリンが、警戒しながら持ち場を離れた。
その隙に、恭輔はもう一匹のゴブリンの背後に回り込んだ。
恭輔は剣を振り上げ、一気に振り下ろす。
気配に気付いたゴブリンが振り返るが、遅かった。
悲鳴を上げて、ゴブリンは消えていく。

「おい、どうした！？」

悲鳴を聞いたゴブリンが慌てて戻ってくる。
それを合図に美咲は呪文を唱え始めた。

「火の元素よ・・・我に従い、敵を討て！」

火の塊はゴブリンに向かって飛んでいく。
不意を突かれたゴブリンは、魔法をまともにくらった。
火を消そうと転げまわるが、力尽きてそのまま消えていった。

「ふ～、やっと入れるね」
「ああ、それより大丈夫か？」
「私？まだまだ元気だよ」

美咲は杖を持ったまま、両腕でガッツポーズを取った。
しかし、森から休まずに歩き続けたので、実際は無理をしていた。

恭輔の足を引っ張りたくなかったからだ。

「さてと、じゃあ入ろっか？」

「・・・そうだな」

美咲は体に鞭打って歩き出した。

その様子を窺いながら、恭輔も遺跡に入っていった。

第三十四話

「なんか不思議なところだね」
「そうだな」

美咲達は遺跡の階段を下りると、広間に出た。
地下のはずだが、なぜか周りが明るかった。
正面には二体の石像が並んでおり、その間に通路がある。
実際は扉があったのだろうか、近くに石の破片が転がっている。

「もしかして・・・」
「ああ、魔王軍だろうな」

遺跡を壊すなど、なんて罰当たりだろう。
美咲はそう思いながらも、先に進んだ。
しかし、いくら進んでも同じような部屋が続いている。
美咲はだんだん体が重くなってきた。

「なんか同じところを歩いてる感じだね・・・」
「いや、そうでもないみたいだ」

恭輔は、まっすぐ前を指差した。
次の部屋への入口に、五匹のゴブリンが談笑している。
美咲達にはに気付いていないようだ。

「またゴブリン・・・」
「ゴブリンは一番下っ端だからな、たくさんいるんだ」

恭輔はそう言うと、剣を抜いた。

そのまま下に構えると、勢いよく走りだした。

「ん？なんだ？」

振り返った一匹のゴブリンを、走った勢いを使って斬り上げた。
声を出す暇もなく、ゴブリンは消えていく。

「おい、敵だぞ！」

恭輔の姿を見て、一斉に騒ぎ出した。
二匹のゴブリンが短剣を持って、恭輔に襲いかかる。
恭輔は片方の攻撃を避け、もう片方の攻撃を剣で受け流す。
そのまま、体勢を崩したゴブリンの腹を斬り裂いた。

「あと三匹！」

ゴブリン達は一瞬ひるんだが、再び襲いかかってくる。
恭輔が一匹の攻撃を受け止めている間に、残りの二匹が横をすり抜けていく。
狙いは後ろでふらついている美咲だ。

「しまった！」

恭輔の声で我に返った美咲は、両手を前に突き出した。
呪文を唱える隙もなく、ゴブリン達が左右から襲い掛かる。
目の前のゴブリンを真っ二つにして、恭輔が走って戻る。

「美咲！」

ゴブリン達の武器が美咲に振り下ろされる。

しかし、攻撃は美咲の目の前で止まっている。

「なんだこれ、固いぞ？」

ゴブリン達の攻撃は、見えない何かに阻まれて届かなかった。
動揺しているその隙に、恭輔は背後からゴブリン達を横に一閃する。
ゴブリン達は声を上げて消えていった。
美咲は全身の力が抜けたように、その場に倒れ込んだ。

「おい、しっかりしろ！」

恭輔は美咲の体を抱き抱えて、声をかける。
意識はあるようで、小さくうめき声を上げた。

「急にどうしたんだ？」

恭輔は訳も分からずに、美咲に話しかける。
しかし、美咲は話す気力もないようだ。

〔魔力の使い過ぎだろう、時間が経てば元気になる〕

「なに？」

恭輔は辺りを見渡したが、もちろん周りには誰もいない。
美咲に視線を戻すと、美咲の杖が光っている。

「まさか・・・」

恭輔は杖を見つめたまま、固まってしまった。

第三十四話（後書き）

最近、見てくださる方が増えて嬉しいです。

できれば感想も書いていただけると、なお嬉しいです。

第三十五話

「今のは・・・杖が喋ったのか？」

恭輔は、美咲が手に持っている杖に話しかけた。
何も知らない人が見れば、どれだけ怪しいことだろう。
恭輔の声に反応したように、杖は輝きを増した。

〜ああ、お前にも聞こえるようにな〜
「そうか・・・」
〜あまり驚かないんだな〜
「武器が喋るっていう話は、何度か本で読んだことがあるんだ」
〜ほぉ〜

ヴォイドは感心したような声を上げた。

「それで、さっきのは何なんだ？」
〜ああ、あれは障壁だな。研究者共にはバリアとも呼ばれている〜
「障壁・・・それでゴブリンの攻撃が届かなかったわけか」

障壁がなければ、今頃どうなっていたことだろう。
しかし、使った直後に倒れるようでは障壁にばかり頼ることはできない。
恭輔は自分の力の無さを恨んだ。

〜こんな状態では魔法は使えないだろうな〜
「でも・・・ここに置いていくことはできない」

恭輔は背負っていた剣を腰に下げ、美咲を背負った。

華奢だとは思っていたが、改めて美咲の体が華奢なことを感じた。
・・・こんな体で、よく休まずに歩き続けられたものだ。

「やっぱり無理してたんだな」

恭輔はそう呟くと、先に進み始めた。
通路を半分ほど進んだところで、美咲が苦しそうに声を上げた。

「あれ、私・・・？」
「魔力の使い過ぎで倒れたんだ」
「そうなんだ・・・ごめんね恭輔」

迷惑をかけてばかりで、美咲は申し訳なく思った。
しかし、体が重く自分で歩くことはできなかった。

「重くない？」
「ああ、軽すぎるぐらいだ」
「そっか、ごめんね」
「何回も謝らなくていい」

美咲は小さく頷くと、顔を上げた。
通路を抜けた先から、話し声が聞こえたからだ。

「恭輔、もしかして」
「ああ、あそこに隠れるぞ」

恭輔は足音をたてないように、巨大な剣士の像の後ろに隠れた。
そのまま腰を落とし、背中から美咲を下ろした。
一呼吸おいて、石像の横から顔を出して様子を窺う。
部屋の最も奥にある石碑の前に、魔物たちが集まっているようだ。

「これがどういう意味か、わかる者はいないのか？」
一人の悪魔が苛立った様子で、部下に問いかけた。
その悪魔は魔物の中でも最も身分が高そうで、見た目は人間と変わらない。
しかし、部下達は首を傾げるばかりだ。
「くそっ、なぜ俺の部下は役立たずばかりなんだ！」
どうやら長い間、同じことを繰り返しているようだ。
悪魔は自分の指を噛み始めた。
その様子を見ながら、恭輔は美咲を見た。
「博士にもらった紙になんて書いてあった？」
「えーっとね」
美咲は鞄から紙を取り出そうと、体を捻った。
その時、足元がふらつき石像の破片を踏んでしまった。
破片は音を立てて、砕け散った。
「あっ、やばいかも・・・」
「誰だ！」
悪魔は音に気付き、美咲達が隠れている石像を振り返った。
すると、悪魔は顎を使って部下に指示した。
一匹のホブゴブリンが石像に近付いてくる。
このままでは魔物たちに見つかってしまう。
「まずいな・・・どうすればいいんだ」

恭輔は舌打ちをして、剣の柄を握り締める。
しかし、美咲はほとんど動くことができない状態だ。
恭輔は覚悟を決めて、立ち上がった。

第三十六話

「恭輔、何するの？」

美咲は、ゆっくりと剣を抜いて立ち上がった恭輔を見上げた。
恭輔は前を向いたまま、微笑んだ。

「俺が奴らの注意を引きつけている間に逃げろ」
「そんなことしたら・・・」
「このまま見つかったら二人ともやられる」

恭輔は勢いよく飛び出そうと、足に力を込める。
すると、魔物の中の一匹が声を上げて倒れた。

「どうした？何があった！？」

突然の出来事に、悪魔は慌てている。
部下達も状況が把握できず、うろたえるばかりだ。
そうしている間も、どんどん魔物は倒れていく。

「美咲、今のうちに逃げるぞ」
「う、うん」

恭輔は剣を収めて美咲の腕を掴むと、気付かれないようにゆっくりと入口に向かう。
しかし、一匹のゴブリンが二人の姿を見つけた。

「バイス様！怪しい奴らがいます！」
「ん？そうだな、奴らを捕えろ！」

バイスと呼ばれた悪魔は、美咲達を指差した。
それを合図に、魔物の群れが一斉に襲いかかってくる。
「くそっ、やるしかないか」
恭輔は剣を抜いて、美咲を庇うために仁王立ちした。
すると突然、恭輔の目の前に青年が下り立った。
「あんたは？」
「自己紹介はあとだよ、先にこいつらを片づけよう」
青年はそう言い残して、魔物の間を駆け抜けていった。
魔物は声を上げることもなく、倒れていく。
「速い・・・全く見えなかった」
恭輔は圧倒的な実力の違いを垣間見た気がした。
バイスは怒りの表情を浮かべて、青年を睨みつけている。
「さっきのはお前の仕業だな？」
「そうだよ、もしかして見えなかったのかい？」
青年は挑発的な笑みを浮かべている。
バイスはサーベルを抜くと、顔を真っ赤にして青年に斬りかかった。
部隊を率いているだけあって、剣の扱いは上手い。
しかし、青年は紙一重で避けていく。
「へー、流石だね。怒りに任せているようで、太刀筋は冷静だ」

その隙に、恭輔は魔物を斬り倒していく。
それに気付いたバイスは、部屋の隅を振り返った。
「ミノタウロス！お前の出番だ！」
「ミノタウロスだって？」

青年は眉をひそめて、部屋の隅を見た。
暗くてよくわからないが、巨大な何かが立ち上がるのが見えた。
その何かが、激しい足音をたてて恭輔に突っ込んでくる。

「恭輔、気を付けろ！」
「ん、なんで俺の名前を？」

青年に名前を呼ばれ、不思議に思ったが追求する余裕はなかった。
ミノタウロスは両刃の斧を肩に担ぎ、恭輔を薙ぎ払った。
その速度は意外に速く、恭輔は剣で防ぐしかなかった。
力が凄まじく、恭輔の体は宙に浮いた。

「こいつ、なんてパワーだ！」

恭輔はそのまま、壁に叩きつけられた。
その勢いは強く、壁に亀裂が入った。
恭輔はゆっくりと壁を滑り落ちた。

「恭輔！大丈夫！？」

美咲は杖で体を支えながら叫んだ。
恭輔がいない隙に、ゴブリン達が美咲に向かっていく。

「やばっ、力が・・・」

美咲は体に力が入らず、呪文を唱えることができない。

その間に、美咲はゴブリン達に囲まれてしまった。

第三十七話（前書き）

前回は中途半端に終わってしまいました。

第三十七話

「ハニー！すぐに助けるよ！」

青年はそう言って、美咲を振り返った。
しかし、バイスが青年の道を塞いだ。

「行かせるわけがないだろう？」

バイスは何度も青年に斬りかかる。
避けることは容易いが、これではキリがない。
青年は何かを思いついたような顔をした。

「そうだ、兵器の在り処を教えるよ」
「なに？」

その言葉を聞き、バイスの動きが止まった。
青年はバイスに向かって、人差し指を立てて微笑んだ。

「ただし、手を出さないことが条件だよ」
「悪魔がその条件を呑むと思うか？」
「別に構わないけど、呑まないなら永遠にここを彷徨うことになるよ？」
「・・・お前ら、もうやめろ」

バイスの声を聞き、魔物たちの動きが止まった。
黙って従う者と、文句を呟いている者もいる。

「さっすが～、物分かりがいいね」

「それで、古代兵器はどこにあるんだ？」
「まぁまぁ、そう焦らないでよ」
青年はゆっくりと石碑に歩み寄った。
すると、床に座り込んでいた恭輔がふらつきながら立ち上がった。
「お前、そんなことしたら・・・」
「まぁ黙って見てなよ」
青年はズボンのポケットから宝石を取り出すと、台座にそれをはめ込んだ。
台座からガタンという音が響いた。
「なるほど、それが鍵だったわけだな」
バイスは頷き、台座に歩み寄った。
その直後、遺跡全体が音を立てて揺れ始めた。
「なんだ？どうなっている？」
バイスが青年を振り返ると、青年は俯いて笑っている。
その姿を見て、バイスは眉をひそめた。
「何がおかしい？」
「いや、確かにあんたの言う通り宝石が鍵になってるよ」
青年は顔を上げて、台座から宝石を外した。
「でも、この宝石じゃない別の宝石だ」
「まさか・・・貴様！」

「そうだよ、この遺跡は崩れる。古代兵器も一緒にね」
すると、遺跡の壁が崩れて大量の水が流れ込んできた。
「この遺跡は海中にあるから、早く逃げないと手遅れになるよ？」
「くそっ！撤退だ！」

バイスは真っ先に、入口へと走っていった。
しかし、天井が崩れ落ちて、通路は塞がれてしまった。
「おや、これは予想外だね」

想定外の出来事に、青年の予定は崩れてしまった。
その間にも海水は流れ込み、腰まで溜まっている。
青年は急いで美咲に近付いた。

「ハニー、大丈夫かい？」
「はい、あなたは・・・レイブンさんですよね？」
「そうだよ、でも今はそれどころじゃない」

海水はすでに肩まで溜まってしまった。
美咲は部屋を見渡して恭輔を探すが、姿が見当たらない。

「恭輔がいない！」
「流されたのかもしれない」
「そんな・・・」
「ここを出よう、じゃないと僕達も流される」
「・・・わかりました」

レイブンは美咲の手を引き、崩れた壁に向かった。

潜れば外に出られそうだ。

「しばらく潜るけど、大丈夫かい？」
「はい、息が続くか心配ですけど」
「僕が引っ張るから、安心していいよ」

二人は大きく息を吸い込み、潜り込んだ。
壁をくぐると、水路のようなものが続いている。
そこを進んでいくと、横から何かが美咲にぶつかった。
それは断末魔の表情をしたゴブリンだった。

「・・・！？」

美咲は驚いて、肺の空気を全て吐き出してしまった。
それに気付いたレイブンは、美咲を引き寄せた。
そのまま顔を近づけるレイブンに、美咲は首を振った。
どうやら口付けで空気を送ろうとしたようだ。
しかし、そのようなことをすれば二人とも生存の可能性は低くなる。

（苦しいだろうに・・・）

断固として拒否する美咲に、レイブンは同情した。
レイブンは急いで、出口を探す。
しかし、美咲は目を閉じており、すでに意識はなかった。
ようやく海に出れた頃には、レイブンの意識もなくなりかけていた。

（くっ、あと少しなのに・・・）

気持ちとは裏腹に、レイブンの意識は遠のいっていった。

第三十七話（後書き）

感想があればお願いします。

第三十八話

「ん・・・」

美咲は波の音で目が覚めた。
どうやら気絶している間に、浜辺に流れ着いたようだ。
誰かが運んでくれたらしく、美咲は上着を掛けられて木陰に倒れていた。

「ここは・・・」
「目が覚めたかい？」

上体を起こして声のした方を振り返ると、そこにはレイブンが座り込んでいた。
美咲と目が合うと、レイブンは微笑んだ。

「レイブンさん？」
「情けないよね・・・安心していいとか言っておきながら、僕まで気絶するなんて」
「いえ、あなたがいてくれて心強かったです」

美咲は首を横に振り、否定した。
しかし、美咲は恭輔のことを考えると、笑顔になることはできなかった。

「恭輔なら大丈夫だよ」
「え？」
「心配なんでしょ？顔を見ればわかるよ」

レイブンは立ち上がると、美咲に手を差し伸べた。
「奥に進んでみよう、もしかしたら彼がいるかもしれない」
「そう・・・ですね」
美咲はレイブンの手を握り、立ち上がった。
「レイブンさん、上着は」
「ああ、寒そうだから着てていいよ」
確かにレイブンの言う通りで、美咲は肌寒さを感じていた。
衣服が海水で濡れているせいかもしれない。
美咲はレイブンの言葉に甘えて、借りることにした。
「ありがとうございます」
「うん、じゃあ行こうか」
美咲は頷き、レイブンの後ろに付いて森の中に入っていった。
☆★☆★☆★
「お、あれは」
レイブンは手を伸ばし、木に実っている赤い果実を採った。
その果実は美咲が見たことのないものだった。
「ハニー、食べるかい？」
レイブンは美咲を振り返り、果実を差し出した。
しかし、美咲は食欲がなく、首を横に振った。

「いえ、私は大丈夫です」
「いいから、騙されたと思って食べてみなよ」
強く勧められ、美咲は渋々その果実を口にした。
かじった途端に、爽やかな甘さと水分が口の中に広がった。
「んっ、おいしい！」
「ふふ、喜んでもらえて良かったよ」
美咲は自然と笑みがこぼれた。
レイブンは微笑んで美咲を見つめている。
「ようやく笑ってくれたね」
「え？」
美咲は顔を上げると、レイブンと目が合った。
レイブンは木を振り返ると、実っている果実を採ってかじりついた。
「それほど大事なんだね、彼は」
「・・・私、恭輔に迷惑かけてばかりなんです。だから今度は私が助けなきゃ」
「そっか・・・僕は恭輔が羨ましいよ、そんなに思ってくれてる人がいるなんてね」
「あ、いえ、そういうわけじゃなくて」
美咲は焦って両手を横に振った。
レイブンは微笑むと、美咲の肩を叩いた。

「大丈夫、絶対に会えるよ」
「はい、それと・・・」

先に進もうとしていたレイブンは振り返った。

「なんだい？」
「ハニーって言うのやめてもらえますか？」

レイブンは意外そうな顔をしている。

「どうして？」
「ハニーって慣れないので、美咲って呼んでもらった方が・・・」
「なるほど、わかったよハニー」

そう言ってレイブンは歩き始めた。
美咲はため息をつくと、レイブンの後に付いていった。

第三十九話

「おや、あれは？」

レイブンは木々の間から、集落のようなものを見つけた。
しかし、美咲は背後で首を傾げている。

「どうしたんですか？」
「集落を見つけたんだ」
「え？」

美咲は目を凝らし、遠くを見つめた。
だが、森が続いているようにしか見えなかった。

「何も見えないですよ」
「ああ、僕は人より視力が優れているんだ」

レイブンはそう言って、自分の目を指差した。
美咲は相槌を打ちながら、何度も遠くを見るが何も見つからなかった。

「まぁ、とりあえず進もうか」
「そうですね」

しばらく進むと、レイブンの言った通り集落に着いた。
森に囲まれているため、小規模ではあるが人口は多いようだ。

「人は多いですね」
「うん、でもここは・・・」

レイブンは言葉を濁して、辺りを見渡した。
黒人や白人など、同じ民族には見えなかったからだ。
それぞれ別の地方から集まったのだろうか。
レイブンは俯いて、記憶の糸を辿った。

「用心した方がいいかもな・・・」
「何か言いましたか？」

美咲は首を傾げて、レイブンの顔を覗き込んだ。
レイブンは微笑んで、首を横に振った。

「いや、なんでもないよ」
「本当ですか？」

美咲は、じっとレイブンを見つめている。
目が合ったレイブンは、笑みを浮かべて頷いた。

「まぁ、僕に見惚れるのもわかるけどさ」
「・・・レイブンさんも恭輔と同じですね」
「え、何が？」
「私に隠し事をするところです！」

美咲は身を乗り出し、強い口調で言った。
レイブンは図星をつかれて、目を逸らした。

「そんなことは・・・」
「レイブンさんも恭輔も気を遣ってくれるのは嬉しいです。でも、仲間なら相談ぐらいしてください！」
「仲間ねぇ・・・さっき会ったばかりの僕が」

レイブンは複雑な表情を浮かべている。
その様子に気付いた美咲は、寂しそうな顔をしている。

「変・・・ですか？」
「変だね。でも、それでいいんじゃないかな？」
「え？」
「さっきの話だけど」

レイブンは美咲に顔を近づけ、耳元で囁いた。

「魔物がいるかもしれない、気を付けた方がいいよ」
「魔物が？」

美咲はレイブンの顔を見た。
レイブンは小さく頷き、後ろに下がった。

「大丈夫、僕が付いてるからね」

レイブンはウインクをすると、奥に歩いていった。
美咲は安心しながらも、背中に寒気を感じた。

第四十話

「ここだね」

レイブンは集落の一番奥で足を止めた。
目の前には、藁で造られた大きな家が建っていた。
それを見ながら、美咲も足を止めた。

「この家がどうかしたんですか？」
「話を聞くのさ、集落の長にね」

権力のある者は財力もあるに違いない。
そう思い、レイブンは家に足を踏み入れた。
しかし、家の中央に焚き火があるだけで人の姿はなかった。

「誰かいませんかー？」

呼んでみるが、返事はなかった。
レイブンの声を聞き、美咲も恐る恐る家の中に入る。
屋内は家具など一切なく、絨毯の上に座布団が三枚ほど置いてあるだけだった。

「いないみたいですね」
「いや・・・いるみたいだよ」

レイブンは家の奥を見つめている。
レイブンの視線を辿ると、奥に人影が見えた。
その人影はゆっくりとこちらに向かってくる。

「おや、お客さんかい？」
奥から腰の曲がった老婆が姿を現した。
優しい口調だが、顔の皺で表情はわからなかった。
「すみません、お邪魔してます」
美咲は軽く頭を下げた。
レイブンもそれに続いて頭を下げると、口を開いた。
「少しお話を伺ってもよろしいかな？」
敬語を使い慣れていないのか、色々と間違っている。
老婆は頷くと、二人に手で座るように促した。
美咲は笑顔で礼を言うと、ゆっくりと座った。
レイブンは警戒しているのか、目で周りの様子を探りながら座った。
「そうだ、お茶でも出させようかね」
「いえ、お構いなく」
「まぁまぁ。おーい、エドワード」
老婆が名前を呼ぶと、奥の部屋から青年が出てきた。
その青年を見て、美咲は思わず身を乗り出した。
それは遺跡で流されたはずの恭輔だった。
「きょうすーー」
しかし、美咲の言葉はレイブンの手によって遮られた。
口を塞がれてしまい、喋ることができない。

レイブンはその場を取り繕うように口を開いた。
「最近、ここに旅の人は来なかった？」
「いや・・・来てないねぇ」
「そっか、ありがとうお婆ちゃん」

レイブンは立ち上がると、美咲の腕を掴んだ。
そのまま腕を引っ張られて、美咲は外に連れ出された。
しばらく歩いたところで、レイブンは振り返り、美咲の腕を離した。

「ごめんね、痛かった？」
「いえ、痛くはないですけど・・・」

いきなり連れ出され、困惑したのは確かだ。
それに、美咲が見たのは間違いなく恭輔だった。

「なんで恭輔が・・・」
「そのことなんだけどね、あれは恭輔だけど恭輔じゃないんだ」

美咲はそれを聞いて、首を傾げた。
しかし、以前に同じような経験をしている。しかも最近だ。

「もしかして、スライムですか？」
「うーん、惜しいね。奴らはドールだ」
「ドール？」

第四十一話

ドール・・・人形？
スライムとは別の魔物なんだろうか？
しかし、恭輔がスライムに負けるはずがない。

「そう、あいつらに実体はない。幽霊みたいなもんだね」
「ゆ、幽霊・・・ですか？」

美咲は全身に鳥肌が立ってしまった。
人形と言えば、３歳の頃に遊んだ＜お人形さん＞しか想像していなかったからだ。
それに、昔から幽霊などの霊関係が苦手だった。

「奴らは人の体に乗り移ることでその人の意識を奪う。その人が強ければ強いほど厄介だね」
「じゃあ恭輔も？」
「ドールの仕業だろうね」

恭輔が敵になるなんて・・・。
操られているとは言っても、戦いたくない。
美咲は俯き、悲しそうな顔をしている。

「恐らく奴らのリーダーは長老に乗り移ってるはず。そいつを倒せば恭輔も自由になるよ」
「一般人を攻撃するんですか？」
「大丈夫、ドールが体から出たところを倒すからね。それより・・・」

レイブンはそう言うと、美咲を見た。
視線を感じ、美咲は顔を上げた。

「ハニーが狙われたら危険だね」
「え？私ですか？」
「うん、君にはとんでもない魔力が秘められている。それがドールに渡ったら・・・」

レイブンはその後の言葉を濁した。
――私ってそんなに魔力があるんだ。

「とりあえず、もっと集落を見て回ろう」
「わかりました。それなら手分けした方が早いですね」
「そうだけど・・・大丈夫かい？」

相当心配なのか、レイブンは困った顔をしている。
――そんなに頼りないのかなぁ？

「大丈夫です、任せてください」
「う～ん、何かあったらすぐに呼ぶんだよ？」
「はい、じゃあここに集合にしましょう」

美咲はそう言うと、振り返り歩き始めた。
その後ろ姿が見えなくなるまで、レイブンは不安そうに見ていた。

第四十一話（後書き）

少し書き方を変えてみました。

感想等お待ちしています。

第四十二話

集落は特に変わった様子はなかった。
大人達は立ち話をしており、子供達はボールを蹴って遊んでいる。
魔物が操っているようには、全く見えなかった。

「ホントに魔物なんているのかなぁ？」

美咲はゆっくり歩きながら、小さく呟いた。
しかし、恭輔の様子がおかしかったのは、自分の目で確認済みだ。
思考を巡らせていると、ボールが目の前を通り過ぎていった。

「お姉ちゃーん、ボール取ってよー」

声のした方向を見ると、少年がこちらに手を振っている。
ボールは転がっていき、家の間を抜けて畑までいってしまった。

「ごめんね、今取ってくるからー」

美咲はボールを拾いに、畑に向かった。
ボールを拾い上げようと屈んだ時、女性の話し声が聞こえた。
顔を上げると、二人の中年女性が美咲に背を向けて話し込んでいる。

「あいつらならあの男よりも使えそうだな」
「ああ、特にあの女の魔力はとんでもないぞ」

その声は、女性とは思えないほど低い声でだった。

あの男は恭輔で、あいつらとは美咲とレイブンのことだろう。
――早く戻らなきゃ！
美咲が勢いよく振り返ると、そこには少年が立っていた。
「お姉ちゃん、どうしたの？」
その声は女性と同じく低い声で、目が虚ろだった。
声が聞こえて、女性達はゆっくりと振り返った。
目は虚ろで、こちらに近付いてくる。

――やばい、逃げなきゃ！
美咲は逃げようとして、周りを見渡した。
しかし、気付けば辺りを人々に囲まれていた。
全員目が虚ろで、何かを呟いている。
「うそっ！いつのまに！？」
人々は足を止めると、大きく口を開けた。
すると、口から何かが目に見えない速さで飛び出した。
美咲は本能で危険を察知し、前に両手を突き出した。
その手から透明な薄い膜が張られ、美咲の体を覆った。
その直後、全方位から襲ってきた何かは弾き飛ばされた。
「あれ？」
それらは魔物だったようで、そのまま空中で消え去った。
残った人々は警戒して、距離をとった。

美咲は周りを見渡して、その場に座り込んだ。

「やっ・・・たぁ」

美咲は倒れ込み、意識を失った。

第四十二話（後書き）

美咲が弱過ぎな気がしますが、いかがでしょうか？

感想お待ちしています。

第四十三話

「なにか・・・様子がおかしいな」

レイブンは異変を感じ、辺りを見渡した。
先ほどよりも歩いている人が減った気がする。

「・・・まさか！」

レイブンは歩いてきた道を走って引き返した。
最悪の展開を想像したからだ。

「お婆さん！」

レイブンは最初に訪れた大きな家に上がり込んだ。
老婆は座布団に座り、紅茶を飲んでいる。

「そんなに急いでどうしたんだい？」
「人を探してるんだけど・・・」
「ああ、あの子なら奥で寝てるよ」

老婆は奥の部屋に顔を向けた。
それを見たレイブンは笑みを浮かべた。

「おかしいなぁ、僕は美咲ちゃんを探してるなんて言ってないよ？」

老婆はレイブンに向き直り、首を横に振った。
自分の言ったことを取り消そうとしているようだ。

「そ、そんなことより、あの子はすごいね～」
「すごい？何が？」
「あんな魔力持った人は初めて見たよ」
「へー、それは変だな」

レイブンは顎に手を当てて、首を傾げた。
その動作は非常にわざとらしく、確信めいたものがあるようだ。
老婆は何かミスをしたのかと、慌てている。

「な、なんだい」
「魔力の大小がわかるものは限られているんだよ」

レイブンはゆっくりと老婆に近づいていく。
二人の距離が近くなるにつれ、老婆は冷や汗をかき始めた。

「一つは魔力がある人間、もう一つは・・・」

レイブンは焚き火の前で足を止めた。

「魔物だよ」

レイブンは冷たい目で老婆を見下している。
その目には光がなく、異物を見るような目だ。

「わ、私は魔法使いだよ」
「ふーん、じゃあ魔法使ってみてよ」

レイブンは冷たく言い放った。
最初訪れたときとは雰囲気が全く変わっている。

「そ、それは・・・」
「出来ないんだろ？まぁ、あんたの正体はドールだから当たり前か」
「・・・なんだ、気付いていたのか」

老婆の声が急激に低くなった。
その声は腹に響くほど低い。

「あの娘を乗っ取ってからにしようと思っていたが・・・仕方ない」
「何？美咲ちゃんは無事なのか？」
「意志が強くてな、時間がかかりそうだ」
「そうか、それがわかればお前に用はない」

そう言うとレイブンは、腰に下げているダガーを両手に持った。
ドールは低い声で笑っている。

「そんなもので俺を倒せるのか？」
「逆だよ、お前程度ならこれで十分だ」
「減らず口を！」

ドールの気に障ったようで、老婆の口からドールが飛び出した。
その大きさは、美咲を襲ったドールの倍以上ある。

第四十四話

――こんなものか・・・
レイブンは姿を現したドールを見て、ため息をついた。
襲い掛かってくるドールの姿が止まって見えたからだ。

「じゃあ消えてもらおうかな」

レイブンは右に避けると、左手のダガーでドールの腹を斬り裂いた。
あまりにも速い動きに、ドールは斬られたことに気付かなかった。
ドールは低い声で悲鳴を上げて、消えていった。
その声は凄まじく、家が大きく揺れた。

「醜い声だ」

レイブンはダガーを腰に収めた。
ドールが抜けた老婆は、レイブンの背後で倒れ込んだ。
美咲を助けるため、レイブンは奥の部屋に入った。

「なんだ、ここにいたのか」

美咲は部屋の隅の藁の上に倒れていた。
しかし、レイブンが視線を向けたのは美咲でなかった。
恭輔が壁にもたれ掛かっていたからだ。

「そういえばドールが乗り移っていたんだっけ？」

誰に言うでもなく、レイブンは呟いた。

そのまま美咲の方に振り返ると、肩を揺すった。
「美咲ちゃん、もう大丈夫だよ」
「んん・・・」
美咲はゆっくりと目を開けた。
意識を取り戻した美咲を見て、レイブンは微笑んだ。
「怪我はないかい？」
「はい、ありがとうございます」
美咲は上体を起こすと、恭輔が視界に入った。
「恭輔！」
美咲は立ち上がり、恭輔に駆け寄った。
そのまましゃがみ込むと、恭輔の体を揺すった。
「恭輔、大丈夫？」
「・・・う、俺は？」
恭輔は頭を振り、顔を上げた。
視界がぼやけているのか、何度も目を擦っている。
「美咲！無事で良かった・・・」
恭輔は安心して、ため息をついた。
その時、レイブンの姿が視界に入った。
「お前は・・・」

「どうも」
「レイブンさんが私達を助けてくれたんだよ」

レイブンはニコニコと笑っている。
その様子を見て、恭輔は不快感を覚えた。
こんなヘラヘラした奴に助けられるなんて、と思ったからだ。

「俺はなんでここにいるんだ？」
「魔物に操られてたんだってさ」
「・・・そうか」

恭輔は強く歯を食い縛った。
魔物に操られていたことが相当悔しいようだ。
レイブンはその姿を気にする様子もなく、口を開いた。

「とりあえず外の様子を見てみようか」
「そうですね、恭輔も行こっ」
「ああ・・・」

恭輔は美咲に腕を引っ張られて、立ち上がった。
美咲達は集落の様子を見るために家を出た。

第四十五話

美咲達が家を出ると人々がうめき声を上げていた。
しゃがみ込んでいる人もいれば、倒れている人もいる。
美咲は倒れている青年に駆け寄った。

「大丈夫ですか？」
「ああ・・・でも頭がぼーっとしてるんだ」

青年は起きあがると、頭をおさえた。
その姿を見た美咲は、青年の頭に手を伸ばそうとした。
しかし、後ろからレイブンに腕を掴まれ、届かなかった。

「ダメだよ、君は魔力が尽きてるんだから」
「でも」

美咲はレイブンを振り返った。
美咲と目が合ったレイブンは、首を横に振っている。
美咲は仕方なく、腕を引っ込めた。

「心配ないよ、ドールはそこまで強力な魔物じゃないからね」

すぐに体調は良くなるということだろう。
それを聞いた美咲は、安心してため息をついた。
すると、大きな家から老婆が姿を現した。
隣には恭輔の姿があり、老婆の体を支えている。

「あんたらが助けてくれたんだってね、ありがとう」

老婆は美咲に笑顔を向けた。
どうやら恭輔から話を聞いたようだ。

「いえ、私は・・・」
「この子が魔物を倒してくれたんだよ」

レイブンは美咲の背中を軽く押した。
いきなり背中を押され、美咲は振り返った。
老婆はゆっくりと美咲に歩み寄ってくる。

「本当にありがとう」
「いえ、私は何も――」
「それじゃ皆の様子でも見てこようかね」

美咲の言葉には耳も貸さず、老婆は歩いていった。
美咲はその姿を見送ると、レイブンに顔を向けた。

「どうしてですか？」
「僕は別に集落を助ける気はなかった。君を助けたかっただけさ」

口説いているつもりなのか、レイブンは美咲に顔を近づけた。
美咲は、レイブンがどこまで本気なのかわからなかった。

「あ、私も様子見てきますね」

美咲は身を引いて顔を遠ざけると、そのまま老婆の後を追った。
レイブンは、逃げるように走り去る美咲を見送った。

第四十六話

「おい」

恭輔は背を向けているレイブンに声をかけた。
聞こえているのかいないのか、レイブンは美咲の後ろ姿を見続けている。
恭輔はそれに構わず話し続けた。

「なんで俺たちを助けた？」
「さっき言った通り、美咲ちゃんを助けたかっただけだよ」
「なら質問を変える、なんで遺跡にいたんだ？」

その質問でレイブンの動きが止まった。
レイブンは答えずに前を見続けていたが、しばらくすると顔だけを恭輔に向けた。

「僕はトレジャーハンターなんだよ、だから遺跡にいて当然でしょ？」
「・・・本当にそれだけか？」
「随分と疑り深いんだね」

恭輔はレイブンの顔を一点に見つめている。
少しでもおかしな動きをしたら、斬りかかってきそうだ。

「まぁ、ご想像にお任せするよ」

レイブンは手をひらひらさせて、歩いていった。
恭輔はその後ろ姿を睨み続けた。

☆★☆★☆★

「それで・・・これはどういうことだ？」

恭輔は体を震わせながら、集落の人々を連れて戻ってきた美咲に問いかけた。

長老を筆頭にたくさんの人が連なっている。

どうやら集落にいる全員を連れてきたようだ。

「あのね、これには訳があってね」

美咲は恭輔をなだめるように、両手を振っている。

レイブンは恭輔の隣で爆笑している。

「じゃあ、その訳とやらを説明してもらおうか」

「うん、この集落の人達はみんな流されてこの島に着いたらしくてね」

美咲は後ろにいる人々に顔を向けた。

それが合図だったかのように、人々は頷いている。

恭輔は一瞥すると、すぐに美咲に向き直った。

「なるほど、だから黒人の人もいたんだね」

レイブンは言いながら、頷いた。

「はい、そういう人達が集まって出来たのがこの集落なんです」

「そこをドールに襲われたってことだね」

「それとこの団体と何の関係があるんだ？」

恭輔は怪訝そうな顔をしている。

聞いてはみたものの、何となく勘づいていたからだ。

「それはね、ドールが流れ着いた人達に乗り移って、すごい人が増えちゃったんだって」

「ああ、それで？」

「それで、自分の住んでいた場所に戻りたいってことなんだけど・・・」

恭輔は、その後に美咲が言いたいことを察した。

どうせ送り届けたいと言うに決まっている。

「あっ、でも近くの街まで送るだけだからね」

「近くってどこだ？」

恭輔は一人ずつ回るわけじゃないとわかり、少し安心した。

そんなことをしていたら、どれだけの時間がかかるかわからない。

一方で、美咲は言いづらそうに俯いている。

「そのことなんだけど・・・」

第四十七話

美咲達は街を目指し、森の中を進んでいた。
大勢で歩くため、道は狭く感じる。
その先頭を美咲達一行が先導していく。
美咲には、先を歩く恭輔の後ろ姿から怒りのようなものを感じた。

「恭輔、怒ってる？」
「別に」

恭輔がそれだけ言うと、会話が終わってしまった。
レイブンは大きくため息をついた。

「この島を出るには街に行かなきゃダメなんだし、別にいいじゃないか？」
「俺達だけなら二日もかからないけどな」

恭輔は集落を出る時に美咲に告げられたことを口に出した。
美咲は申し訳なさそうに、口を開いた。

「それはそうだけど、お年寄りがいるんだから仕方ないし・・・ついでにって考えれば、ね？」
「そうそう、それに決まったことに文句言うのは男らしくないよ？」

レイブンの言葉に、恭輔の足が止まった。
しかし、全体の動きが止まることを考え、再び歩き始めた。

「僕はハニーのそういうところ、好きだけどね」

「え？あ、ありがとうございます」
軽く受け流すと、美咲は周囲を見渡した。
今の状態で魔物に襲われたら、ひとたまりもないからだ。
「大丈夫だよ、この僕がついてるんだからね」
「ドールに襲われた時は守れなかったみたいだけどな」
恭輔は前を向いたまま、悪態をついた。
レイブンは肩をすくめ、美咲に顔を向けた。
「彼は手厳しいね～」
「あ、あれって・・・」
レイブンが言うのと同時に、美咲は進行方向を指差した。
前方右側の草むらが揺れている。
「魔物か？」
恭輔はすぐに斬りかかれるように、背負っている剣に手を伸ばした。
美咲は杖を出し、構えている。
しかし、草むらから姿を現したのは魔物ではなかった。
「あれって・・・ウサギ？」
ウサギは耳を立てて、辺りを見渡している。
体毛が長く、色は真っ白だ。
それを見た集落の子供達から、歓声のようなものが上がった。

「わぁ～、かわいい！」

美咲はウサギを触ろうと、近付こうとした。
その直後、視界からウサギの姿が消えた。

「あれ？ウサギは？」

美咲はウサギを探し、見回した。
レイブンは右側の森をじっと見つめている。

「多分、あれじゃないかな？」

レイブンは森の奥を指差した。

第四十八話

美咲達はレイブンが指差した方向に視線を向けた。
遠くに、大量の蔓を振り回している植物がみえる。
それは美咲達に気付いているようで、戦闘態勢に入っている。

「あれって・・・魔物？」
「みたいだな」

恭輔は背負っている剣を抜いた。
レイブンはその魔物を注意深く観察している。

「よし、僕と恭輔で奴の気を引きつける。その隙に美咲ちゃんは魔法で攻撃してくれるかな？」
「わかりました」
「おい、勝手に決めるな」

恭輔は勝手に決められ、不満の声を上げた。
しかし、恭輔の抗議は戦闘態勢に入っている二人に届かなかった。
恭輔は仕方なく、剣を下で構えた。

「みなさん、危険なのでここから動かないで下さいね」

美咲が集落の人々に注意を促すと、急いで一ヶ所に集まった。
美咲は魔物に杖を向け、気持ちを切り替えた。

「じゃあ二人とも、準備はいいかい？」

レイブンは魔物の様子を窺いながら、美咲と恭輔に問いかけた。
美咲は返事をし、恭輔は無言で頷いた。

「それじゃあ・・・いくよ!」

レイブンと恭輔は、魔物に向かって同時に走りだした。

第四十八話（後書き）

ご無沙汰の更新ですが、非常に短いものしか書くことができませんでした。
すみません。

第四十九話

レイブンは右、恭輔は左から魔物に向かっていく。
魔物は二人に向け、無数のツルを伸ばした。

レイブンは腰のダガーも抜かずに、攻撃を全て見切り紙一重で避けている。
反対に、恭輔は向かってくるツルを全て斬り落としていく。

「恭輔、それじゃ体力が持たないよ？」
「俺の心配してる場合か？」

魔物は避けるレイブンが癇に障ったのか、大量のツルを一度に振り回した。
しかし、レイブンはそれすらも全て避けきった。
余裕があるのか、笑みすら浮かべている。

「レイブンさん、すごい・・・」

美咲はその姿に目を奪われた。
そのため、美咲に向けられたツルには気付かなかった。

「嬢ちゃん、危ねぇぞ！」

男性の声で我に返ったが、すでにツルは目の前に迫っている。
美咲は顔の前で腕を交差させ、目を瞑り顔をそむけた。

しかし、体に痛みはない。
美咲が目を開けると、足元に切断されたツルが落ちていた。
「ぼさっとするな！」
恭輔はツルを斬りながら叫んだ。
どうやら恭輔が助けてくれたようだ。
「ごめん恭輔！」
美咲は謝りながらも、以前ヴォイドに言われたことを思い出していた。
☆★☆★☆★
「魔法使いの基本？」
美咲はヴォイドが言ったことを復唱した。
魔法使いに基本があるとは思っていなかったからだ。
〜ああ、お前は砲台タイプだからな〜
「魔法だけ唱え続けろってこと？」
〜そうだ、それも相手の注意が自分からはなれた時に使え〜
「そっか、詠唱中は無防備だもんね」
美咲はそれを考えると、改めて自分が危険な世界にいることを自覚した。
〜だから一人の時はなるべく戦闘を避けるようにしろ〜
「うん、気をつけるようにする」

☆★☆★☆★

「そうだ、二人に注意が向くまで待たなきゃ」

美咲は見ているだけで何もできないことが悔しかった。

これでは魔法が使えても、役立たずではないか。

そんなことを考えていると、全てのツルがレイブンに向けられた。

――今しかない！

美咲は杖を魔物に向け、呪文を唱え始めた。

第五十話

「風の元素よ……我に従い、敵を討て！」

美咲が呪文を唱えると、杖の先端から無数のかまいたちが発生した。

それはすごい速さで、魔物に向かって飛んでいく。

魔物は魔力に反応して、ツルを伸ばした。

しかし、風の刃はツルを切断しながら魔物に近付いていく。

風は音を立てて魔物を通り過ぎていった。

「まさか……外れた？」

美咲はもう一度呪文を唱えようと、杖を構えた。

それに気付いたレイブンが手で制止した。

「魔法はもう使わなくて大丈夫だよ」

美咲はそう言われて、動きを止めた。

よく見ると、魔物の体全体に穴があいている。

伸ばしていたツルが地面に落ちると、魔物は徐々に消えていく。

それと同時に、人々から歓声が上がった。

恭輔は剣を収め、肩で息をしながら戻ってきた。

それを見た美咲は微笑んで声をかけた。

「お疲れ様、恭輔」

「ああ」

恭輔の姿を見て、レイブンはため息をついた。
「その調子じゃ連戦があっても耐えられないよ？」
「余計なお世話だ」
恭輔は額の汗を拭ると、先に進み始めた。
肩が痛むのか、腕を後ろに回している。
「あんなのと二人旅なんて大変だね」
レイブンは恭輔の後ろ姿を見ながらため息をついた。
美咲はレイブンの方を見ながら、首を横に振った。
「いえ、恭輔がいなかったら私はここにいませんよ」
レイブンが美咲を振り返ると、美咲は笑顔を見せた。
その顔を見て、レイブンは少し罪悪感を覚えた。
「あの～」
村人の一人が美咲に話しかけた。
先に進んでいく恭輔に付いていくべきか、困惑している様子だった。
「あ、すみません」
美咲は人々を安心させるために、駆けて行った。
「恭輔がいなかったら……ねぇ」

レイブンは美咲の後ろ姿を見送った。

第五十話（後書き）

大きく期間が空いてしまいました。

見てくださる読者の方々、申し訳ありません。

第五十一話

「暗くなってきましたね」

美咲は紫色に染まった空を見上げた。
異世界の方が、現代よりも空が綺麗だ。
今まで空を見るようなことがなかったためか、余計そう感じる。
振り返っても、最後尾の顔が見えなくなってきた。

「そうだね、今日はこの辺で休もう」

レイブンは足を止めて振り返った。

「火はどうする？」

恭輔は辺りの様子を窺っているレイブンに問いかけた。
レイブンは恭輔の顔を見ると、微笑んだ。
恭輔はその笑顔に何か嫌な予感がした。

「恭輔、君は体力には自信があるよね？」

「何が言いたいんだ？」

「別に？ただ彼らには戦う力が無いし……」

レイブンは怪訝そうに見てくる恭輔から目を離して、肩で息をしている集落の人々を見た。
今まで魔物に操られていたせいか、体がまだついてこないようだ。

「あの、私が薪を集めてきましょうか？」
「美咲ちゃんが？」
「はい、私はまだ動けますから」
「うーん、女の子には行かせたくないんだけどな～」
「わかった、行けばいいんだろ？」
恭輔は剣を背中から外し、美咲に預けた。
押しつけられた美咲は戸惑いながらも、剣を両手で受け取った。
しかし、剣は思った以上に重く、足元がふらついた。
――恭輔はいつもこれを使いこなしてたんだ。
「そうかい？悪いねー」
「行って欲しいって素直に言えばすぐに行ったよ」
恭輔は皮肉を込めてそう言うと、森の方に歩いていった。
「あの～」
一人の中年男性が恭輔に声をかけた。
恭輔は足を止め、無言で振り返った。
「その必要はないと思いますよ？」
男性は集落から引いてきた台車に歩いていくと、掛かっていた毛布を外した。

積んであった荷物に恭輔は目を見開いた。
それを見たレイブンは感嘆の声を上げて、台車に近寄った。
「積んであったんだ、薪」
そこには大量の薪が積んであった。
これだけあれば一週間は余裕でもちそうだ。
「念のために積めるだけ積もうと思いまして」
「わー、ありがとうございます！」
美咲は両手で男性の右手を握った。
男性は左手で頭をかきながら、照れ臭そうに笑っている。
「あるなら最初から言えよ……」
恭輔は呆れたように呟いた。

第五十二話

辺りは暗闇に包まれて、昼とは違った空気が流れている。
静かすぎて、不気味ささえ感じるほどだ。
しかし、薪で組まれた火の周りは子供の元気な声で賑やかだ。

「実際は静かにして欲しいところだけど……」

レイブンは予備の薪に背中を預けて、干し肉を噛みちぎった。
干し肉は集落から持ってきたものだ。

「まぁ、子供にすればキャンプみたいなものかもしれないですね」

美咲は子供の姿を嬉しそうに見つめている。
その横で恭輔は夜中の見張りに備えて、すでに仮眠をとっている。

「お母さーん、見て見て！」

一人の子供が何かを持って母親に走り寄った。
母親は話し込んでいて、子供がいなかったことに気付いていなかったようだ。

「勝手に離れたら危ないでしょ？」

「ごめんなさい、でも可愛いでしょ？」

そう言って子供は抱えていたものを差し出した。
真っ白な毛に覆われた、小動物だった。

それを目にしたレイブンは子供に駆け寄り、しゃがんだ。
「ちょっと見せてもらえるかな？」
手を出すレイブンに、子供は笑顔で渡した。
レイブンは様々な角度から見ると、ため息をついた。
「これはウルフの子供だね」
「ウルフ？」
美咲は中腰になって横から覗き込んだ。
ウルフの子供は人懐っこく、尻尾を振っている。
レイブンは頷くと、立ち上がった。
「群れからはぐれたのかもしれない」
「じゃあ親に返さないといけないですね」
「そうだね、問題は……」
レイブンが言いきる前に、周りから草の擦れる音がした。
すると、何十匹ものウルフが姿を現した。
どうやら、子供を探しに来たようだ。
ウルフの群れは低い声でうなっている。
「あ、丁度いいところに――」
「待て！」

レイブンの声で美咲は足を止めた。
いつもと違うレイブンの声に、美咲は振り返った。
「それ以上近付くと襲われるよ？」
そう言われ、美咲はゆっくり振り返った。
ウルフは牙を出し、戦闘態勢に入っている。
確かに、近付けば危険な状態だ。
「なんで……」
「僕達が子供を連れ去ったと思ってるんだろうね」
集落の人々は恐怖でざわつき始めた。
親達は子供を抱き寄せ、守っている。
「静かに！騒ぐとウルフを刺激するよ」
一喝され、人々は静かに座り込んだ。
その間にもウルフはじりじりと近寄ってくる。
「仕方ないか」
レイブンは腰のダガーに手を伸ばした。
しかし、美咲はレイブンの腕を掴んで首を横に振った。
「子供を返してほしいだけなんですよね？」
「そうだけど、相手は興奮状態なんだよ」

「私が何とかします」

何とかとはなんてアバウトなんだろう。
レイブンは美咲の力強い目に、任せることにした。
もちろん、何かあればすぐに手を出すつもりだ。
美咲は振り返り、ウルフに近付いていった。

第五十二話（後書き）

最近はもう一つ作品を考えてます。

近々書きたいと思ってます。

第五十三話

美咲が近付くにつれて、ウルフのうなり声は大きくなっていく。
いつ噛みつかれておかしくはない。
それでも美咲は歩き続け、ウルフの一歩手前で止まった。

「ごめんね、子供を勝手に連れてったりして」

ウルフは変わることなく美咲を睨み続けている。
美咲はそのまま話し続ける。

「大切な子供だし、子供だって親と一緒にいたいよね」

美咲はウルフに背中を向け、ウルフの子を抱える子供の元に歩いていく。
子供は不安そうに美咲を見上げている。
美咲はしゃがみ込むと、子供の目をじっと見る。

「その子、お姉ちゃんに渡してもらえないかな？」

子供は渡したくないという気持ちで、無言で体を捻ってウルフの子を美咲から遠ざけた。
美咲は軽く息を吐くと、口を開いた。

「君のお名前は？」

「……ラスク」

「ラスク君はお母さんのこと好き？」

ラスクは遠慮がちに小さく頷いた。
美咲はラスクに微笑み、ウルフの子の頭を撫でた。
「この子もラスク君と同じで、お母さんのこと大好きだと思うよ」
ラスクは腕に抱いているウルフに視線を落とした。
ウルフは丸い瞳を上げて、小さく鳴いている。
「ラスク君はお母さんと離れ離れになったら悲しいでしょ？
この子もそうだと思うよ」
ラスクはしばらく俯くと、顔を上げた。
その瞳は心なしか少し潤んでいる。
そして、ゆっくりとウルフの子を美咲に差し出した。
「ありがとう、ラスク君」
美咲はラスクの頭を優しく撫でると、ウルフを受け取った。
ラスクは手ぶらになると、母親に抱きついた。
母親は一言叱ると、ラスクを抱き締めた。
「さてと」
美咲は立ち上がると、ウルフの群れを振り返った。
ウルフは子供が美咲の手に渡ったことで、さらに警戒心を強めた。
美咲が子供に危害を加えると思っているようだ。
その気配を薄々感じながらも、美咲はウルフ達に近付いていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3461s/

平和な世界

2011年10月29日19時18分発行